

ナジェージダ・プトゥーシキナ『ブラボー、ラウレンシア！』（2001）

2幕とエピローグからなる喜劇

翻訳 大森雅子

登場人物

オリガ・ヤーコヴレヴナ…成人した息子がいるが、年老いた女性には見えず、上品な貴婦人といった風貌。若作りしているのではなく、体型がよく保たれている女性。若い頃バレリーナだった様子が覗える。

オレグ…彼女の息子。若い男で物腰が柔らかく、心が広い。行儀が大変よく、にこやかな表情をしている。女性なら誰でも、こんな男性と是非とも結婚したいと思う。またしゅうとめにとっても、こんなお婿さんがいてくれたらと思うだろう。

エーリヤ…病的なほど正直者で、直情径行的、愛他的性格の女性。40代なのに、こういった資質は、決して誰しもが持っているものではないということがいまだに理解できていない。毎回、そのことに気づくたびに、腹を立てて挫折感に陥る。このような女性が何とか持ちこたえているのは、おとぎ話のようにラッキーな出来事が起こるからである。彼女は我を忘れて人を愛するが、同時に極端なことを要求する。男性にとっては、こういう女性は足手まといになる。彼女は幸せになりたいと思っている。というのも、極端なことを志向する人間はとっっても幸せになれるか、悲劇的なほど不幸せになるかのどちらかであるからだ。彼女が両極端の中間にいるようなときは、不安で仕方なく、いらいらして、自分は幸せになんかなれないと信じきっている。疑り深い年頃であることと、妊娠していることが、こういった性格を助長してしまっている。

マイヤ・イワーノヴナ…落ち着いた、地方出身の女性で哲学的にもものを考える女性。無邪気だが、愚かではなく、礼儀正しく、内気な女性。人を見る目があって、常識をわきまえている。常にあらゆることに対して疑り深くなっていて、自分の振る舞いが正しかったかどうか自信が持てない。そのため、無意識的に運命論者となっている。

第一幕

暗転。

オレグ（彼の声だけが聞こえる）エーリヤ……ほんとに信じてくれよ、これが最後だから、今日中にね、なんとかするから！ 引き延ばしてるわけじゃなくって……じっくり考えてたんだよ。だから、今日はママに心の準備をしてもらうことにして、最終的に言うのは……明日にしようかなって。いや、それは違うよ……いや、昨日君が言ったことは正しかったさ、特に昨日の夜はね……怖がってるんじゃないかって？ とんでもない！ 明日に

しよう！　これが最後だ！……でも、やっぱり明後日にしようかな……お願いだから叫ばないでくれよ！　君はそんなに興奮しちゃだめだ！　喜んでくれるに決まってるさ、ただ……今思い出したんだけど、明日はママのお祝いの日だった、せっかくのお祝い事を台無しにしたくないし……どんなお祝い事だって？　いや、ママのお祝いさ……誕生日だよ……いや、ママのじゃなくて、僕のね……いや、ちょっと……違うよ……分かるだろう……そんな、今すぐなんて無理だよ！　今は家にいないし！

彼が電話で話している間に、少しずつゆっくり、オレグとオリガ・ヤーコヴレヴナの平穏で快適なアパートが照らし出される。現代の流行の間取りで、客間とダイニング、キッチンが1つになっている。しかし、キッチンは上品な仕切りで区切られている。壁の一方に、バレエの練習スペースがある。大きな窓にカーテンはかけられていないが、布地で綺麗に飾られている。玄関のドアと客間との間には小さな廊下がある。客間には、オレグとオリガ・ヤーコヴレヴナの部屋に通じるドアがそれぞれある。今オレグは自分の部屋で電話をしている。観客からは、部屋の一部だけが見えるようになっており、立派な作りの4本脚のベッドが部屋に置いてあるのがわかる。

オレグ　わかってるよ、君と決めたとおりにする、ママがうちのアパートに帰ってきたら、すぐに言うから！　もちろん、覚悟できてるさ！（冗談を言おうとする）ほら、鎮静剤も買って、1週間もポケットに入れて持ち歩いてるんだよ……これを数滴垂らして飲もう……ママがアパートに帰ってきたら、きっと喜んでくれるだろうな……

アパートに、冬の恰好をしたオリガ・ヤーコヴレヴナが入ってくる。食料品の入った袋を数個重そうに抱えている。息子の声が聞こえてきたので、彼の方に向かう。

オレグ（興奮して）うちに帰ってきたら、開口一番「僕、結婚することにしたよ」って言うから！

オリガ・ヤーコヴレヴナ（彼の部屋を覗き込み、嬉しそうに声をかける）オレージェク¹……家にいるのね？　何か私に話したいことがあったんじゃない？

オレグは受話器を覆い、母に投げキッスを送ってから、軽くジェスチャーで部屋を出るように促す。

オリガ・ヤーコヴレヴナは、彼に微笑んで、玄関に戻ると、買い物袋が倒れないように置き、上着を脱ぐ。

オレグ（声を低めて）だから、君が望んでいるように何だっていつもうまく行くからさ……

¹ オレグの愛称形。

君の声を聞くと全身が麻痺しそうだ……いや、あそこは麻痺してないさ、むしろ正反対だよ……僕は君の犬、ご主人様に何でも従うよ……ワンワン！

オリガ・ヤーコヴレヴナ（慌てて彼の部屋に入ってきて）ワンちゃんがいるのね？ ワンちゃん！ ワンちゃん！

オレグ（片手で受話器を覆って）ごめん、仕事でトラブルがあって。

オリガ・ヤーコヴレヴナ（理解して）気にしないで！……続けなさい！ ワンちゃん、どこにいるのかしら？ かわいいワンちゃん、どこに隠れているの？

オレグは母が部屋を出るように手を振る。

オリガ・ヤーコヴレヴナ（オレグに）全くどこに消えてしまったのかしらねえ？

オレグ（警告するように唇に指をあて、会話を続けているように装う）その便器につながるパイプの角度は、45度ですね。

オリガ・ヤーコヴレヴナ（部屋を見回り、家具の下などを探す）ワンちゃん！ ワンちゃん、ワンちゃん……（舌を鳴らす）

オレグ 角度をチェックしてください！もし角度が正しくないと、水漏れしてしまいますから……（受話器を覆って、オリガ・ヤーコヴレヴナに）何を探してるの？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 犬よ！

オレグ（受話器を片手に持って、ベッドの下を覗き込み、オリガ・ヤーコヴレヴナが探しているのを手伝ってあげるが、できるだけ早く出て行ってほしいと思っている）犬だって……おい、どこにいるんだ？……（はっとして）どんな犬だっけ？（受話器に向かって）傾斜を確認してください。しっかりやってくださいよ、工事をやり直すことになれば、その分あなたの給料から差し引かせてもらうことになりますから！²（オリガ・ヤーコヴレヴナに）何を探してるんだっけ？

オリガ・ヤーコヴレヴナ ワンちゃんよ！

オレグ どうして犬なの？ ラクダってことはないの？

オリガ・ヤーコヴレヴナ ラクダは吠えないでしょ！ あのワンちゃん、きつとお腹すいてるんだわ。

オレグ ここには犬もラクダもないよ。いるのは僕だけだから、何か食べさせてくれるんだったら僕が全部いただくよ！（受話器に向かって）パイプの角度を確認してください！もし角度が正しくないと、水浸しになるから！

オリガ・ヤーコヴレヴナはまだ傍に立っていて、オレグを悩ませている。

オレグ（受話器を手で覆い、仄めかすように）ママ？

² オレグは自分の部下に話しかけているように装っている。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 誰か吠えたんだもの！

オレグ だから、ママ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 残念だわ！ あなたはもう大人になってしまったのよね。でも、私、この家で何か面倒をみてあげられるものがほしいわ……(部屋を出ていく)

オレグ (受話器に向かって)もしもし！ もしまし！ (オリガ・ヤーコヴレヴナを見送って、いまいましように)切れちゃった！

オリガ・ヤーコヴレヴナ それでいいのよ！ あなたったら、24 時間働き尽くめで結婚もしないし、仕事以外に何もやらないじゃないの！ バッグをキッチンまで持ってきてよ！ (キッチンに向かう)誰かのことに惚れこんで、頭がおかしくなって…結婚してくれたらいいのに……それで子供が産まれてから、24 時間働けばいいのよ……

オレグ (ボーッとした様子で買い物袋を持ってきて)そう、そうだね、ママの言うとおりでよ……(電話の方に急いで向かう)今すぐ、今すぐ電話しないと……

オリガ・ヤーコヴレヴナ (電話へ向かう道を遮って)明日でいいじゃない、明日で……

オレグ (彼女を持ち上げて、脇にどかせて)洪水だよ！ 洪水になってるかもしれないんだ！ 全部水浸しだよ！(電話の方へ急いで向かう)

オリガ・ヤーコヴレヴナ (彼の後に続いて)水浸しね、きっと！ でも何だって便器のことも信用できないような人と関わらなきゃいけないのよ？

オレグ (受話器に向かって)回線の調子が悪いみたいですね、今かけなおします。

オリガ・ヤーコヴレヴナ オレグ！ 言っておきますけど、私があなたと話しているのよ！ あなた、最近なんだかぼーっとしてるわ！ 働きすぎだからよ！

オレグ (好意的に)ママが言うことはいつも全部正しいよ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ そんな言い方やめてちょうだい、それって、まるでツタンカーメンのひいおばあちゃんよりも年上の相手に向かって言う台詞だわ！

オレグ (母から離れて、電話の相手に対して文句を言うように、おどおどしながら)何で電話を切ったんだ？ 何で僕が便器の話をはじめたかって？ だって、これは僕の人生の一部だからだし、だいたい……この世に便器がある限り、誰かがそのことを話さなきゃいけないだろう。何がわかったって？ ママが傍にいるから、僕が便器のことを話し出すんじゃないかって？ フロイトは関係ないだろう？ 子供のころのオマルのことなんて覚えてないさ！ いいかい、便器だとかオマルのことを言ってるのは君のほうじゃないか！ ごめん、僕が間違ってた。誓うよ、もう二度と便器のことは口に出さない！ 仲直りだ、いいね？ 君は今バスルームにいるんだろう。やっぱりそうか……君の湿っぽい声でね……シャンプーの香りがしてきた……リンゴの香りだろう？ 水が滴ってる音がするね……

オリガ・ヤーコヴレヴナがテーブルに食事を並べ終え、オレグを呼ぼうと近くまで行く。

オリガ・ヤーコヴレヴナ やっぱり水浸しになっちゃったんでしょう！ だったらもう適

当に終わらせときなさいよ！（オレグの傍に立って、プレッシャーをかける）

オレグ（受話器に向かって）あああ、もちろんタンクの部分を壁の中に隠すのがベストではありますけど。そういう便器の方が、今風ですよ。畜生、また切れちまった！

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなた、2週間前から、何か重要なことを私に話そうとしてるわよね。

オレグ 1分だけ待って！

オリガ・ヤーコヴレヴナは部屋を出る。

オレグ（すぐに電話をかける）ごめん、ほらもう跪いた！（実際に跪く）明日の朝、君を連れてこよう。明日は一日中君と一緒にだからさ、1分後にはママに全部話そう。

オリガ・ヤーコヴレヴナ（戻ってきて）1分たったわよ！ あなた、何を探しているの？（同様に跪く）

オレグ（受話器を手で覆い）何をしてるの？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 探しものがあるの。

オレグ 何を？

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなたが探してるものって、何なの？

オレグ 僕は何を探してるんだっけ？

オリガ・ヤーコヴレヴナ そんなの知らないわ。

オレグ（受話器に向かって）明日伺いますから……

オリガ・ヤーコヴレヴナ（遮って）約束なんかしちやだめよ！ 明日は絶対にダメ。誕生日じゃないの！ まさかあなた忘れたの？

オレグ ママ、僕は電話中なんだよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなたったら、私の気持ちよりも便器の方が大事なのね！（出て行く）

オレグ みんな便器のことが嫌いだって言うのか？（受話器に向かって）明日の朝には君のもとに行くからさ、今日はまたあとで電話する……キスを送るよ……なんだって？ 危ないよ！ 気をつけるんだ！ 今すぐ、今すぐ行くから……（受話器を置いて、部屋から飛び出し、上着を着始める）

オリガ・ヤーコヴレヴナ（彼に背を向けて立っているために、彼が上着を着ていることはわかっていない）やっ、夕飯一緒に食べられるのね！ ところでビジネス・センターの注文の件はどうなったの？

オレグ ビジネス・センター？ ああ……来週はつきりするんだ……たぶん、うまく行くと思うよ……

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私ね、その仕事がうまくいくように望んでいいものか、よくわからないのよ……だって、そうになったらきっとあなたに会えなくなってしまうでしょう。

オレグ (上着を着終えて彼女の方に近寄る) 大げさだなあ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ (振り返って) どこに行くの？

オレグ すぐ戻るから！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 2週間前から、あなた、私に大切なニュースがあるって言ってるわよね！

オレグ それは明日にしよう！(彼女にキスをする)

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなたのこと、1日中待ってたのに！ 朝から晩まで待ちわびてた母親と夕食を共にするくらい、便器だって待っててくれるはずよ。

オレグ 洪水なんだ！ 朝方には戻ってくるから！ (机から何かをつかみ、走り去ろうとするが、ドアのところで) ママ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 何よ？

オレグ ママのこと、大好きだよ！ (走っていく)

オリガ・ヤーコヴレヴナ (オレグの台詞に続いて) このところ、それは全く目につかなくなっただけだね！

すぐに電話が鳴る。

オリガ・ヤーコヴレヴナ (受話器を取って) ももしも！ あなたなの、一晩中あの子が電話で話していたのは？ 結局、この寒空の下、夜中に、おなかを空かせたままあなたの便器を直しに出かけたわよ……

小さな 2 人用のテーブルに、お祝いの食事が並んでいる。その傍に着飾ったオリガ・ヤーコヴレヴナとオレグがグラスを持っている。窓の外では、ボタン雪が降っている。

オリガ・ヤーコヴレヴナ ……私は窓辺に立っていた。今みたいに、暗い町に雪が降り積もっていた……1つだけ明かりの灯った窓があったわ、はるか彼方に……私は絶望的なほど不幸せだった。だから、その窓に人の顔が浮かび上がったように見えたくらい……そしてその窓が私に何か知らせを告げようとしていた……そのとき、私のお腹の中にいたあなたが、こぶしを振り上げたの……あなたったら、お腹の中から私を応援しようとしてくれたのね……もう 35 年前になるわ……人生ってなんて短いのかしら！

オレグ 僕の誕生日はいつも泣いちゃうよね！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 幸せだからよ！

オレグ 幸せだったら笑ってみたら？ (グラスを上げて) ママに乾杯！

オリガ・ヤーコヴレヴナ かわいいあなたに乾杯！

オレグ 僕達に乾杯！

飲み干す。

オリガ・ヤーコヴレヴナ (袋を彼に差し出して)プレゼントよ！

オレグ シャツにネクタイ……ちょうど欲しかったんだ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 着てみて！

オレグ カッコいいシャツだ、それに……ネクタイも、あまり見ない柄だね。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 気に入った？

オレグ すごくいいね！

オリガ・ヤーコヴレヴナ じゃあ、着てみてよ！

オレグ またの機会にしよう！

オリガ・ヤーコヴレヴナ お願いだから！

オレグ ものすごく腹ペコなんだ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ わがまま言わないで！

オレグはシャツを着替える。オリガ・ヤーコヴレヴナは手伝ってあげる。

オレグ どう？

オリガ・ヤーコヴレヴナ (自信なさそうに)自分で見てみたら？ (鏡を近づけてあげる)
どう？

オレグ なかなかいいね！

オリガ・ヤーコヴレヴナ ちょっと大胆すぎるかしら？

オレグ なんとか大丈夫さ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 奇抜すぎない？

オレグ 全く問題ないよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 着てくれる？

オレグ このシャツとネクタイ、もうすっかり僕のお気に入りだよ。着替えるのは夜寝るときだけにしておこう、でも、ずっと着ていたいくらいだよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ ゴマするのがうまいんだから！ (鏡を元の場所に片付けて戻ってくる)何してるの？

オレグ さっきの服に着替えるところ。だって、もうほとんど夜でしょう。

オリガ・ヤーコヴレヴナ ちょっと座って！

オレグ (座る)座ったよ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 話してちょうだい！

オレグ 何を？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 全部！ 怖いのか？
オレグ 怖い？ 違うよ。
オリガ・ヤーコヴレヴナ 気がかりなことがあるんでしょう？
オレグ 違うさ。
オリガ・ヤーコヴレヴナ とにかく、話してちょうだい！
オレグ このサラダ、すごくうまそうだ！
オリガ・ヤーコヴレヴナ 何を隠しているのか？ どこか……体の具合でも悪いんでしょう！
オレグ 体の具合？ 違うよ。
オリガ・ヤーコヴレヴナ 私、偶然あなたのポケットの中に見つけたものがあるの……
オレグ ポケット？ 何？
オリガ・ヤーコヴレヴナ 鎮静剤よ。これはどうして？
オレグ 鎮静剤？ それは同僚にあげようと思ってて……僕の体調は全く理想的なくらい良いよ。
オリガ・ヤーコヴレヴナ それでも、何か私に言いたいことがあるんじゃないの？ ひょっとして、あなた……結婚することにしたの？
オレグ 僕が？！
オリガ・ヤーコヴレヴナ もうあなたも 35 なんだし、いつ結婚したっていいはずよね……私、覚悟はできてるわ。
オレグ このサラダ、食べておこうかな。新鮮なうちにね。
オリガ・ヤーコヴレヴナ サラダをちょうだい！ いますぐに全部話さない！ ああ……(心臓があるところを手で押さえる)
オレグ (飛び上がって)ママ？
オリガ・ヤーコヴレヴナ チクチク刺さるように痛いのか！
オレグ 今すぐ、今すぐに……(鎮静剤を取り、水を注ぎ、コップに数滴垂らす)ほら、今鎮静剤を飲んでくれたら、全部話すからさ、でもまずは……(コップを渡して)飲んで！
オリガ・ヤーコヴレヴナ (無意識に飲み干す)飲んだわ！ 話してちょうだい！
オレグ これだよ！(彼女に封筒を渡す)
オリガ・ヤーコヴレヴナ 封筒？
オレグ 中をのぞいてみて！
オリガ・ヤーコヴレヴナ 驚かすつもりね……
オレグ 怖がらずに！
オリガ・ヤーコヴレヴナ (中身をよく見る)チケット……わけがわからないわ。
オレグ 飛行機のチケットだよ！
オリガ・ヤーコヴレヴナ 何があったのか？
オレグ 明日の朝、空港まで連れて行ってあげるから。

オリガ・ヤーコヴレヴナ どうして？

オレグ あさってには、ママはもうエジプトのピラミッドの傍にいるんだよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私が？

オレグ だって、夢だったじゃないか！

オリガ・ヤーコヴレヴナ じゃあ、あなたは？

オレグ 僕？ 僕はビジネス・センターの注文の方を何とかしないとイケないんだ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ じゃあ、あなたのこと、待ってるわ。

オレグ もしこの注文の話がうまくいけば、もっと待つことになるよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ ピラミッドなんて、もう数千年も変わらずそのままじゃない…
…だからこの1、2年くらいは、ピラミッドの方は何も起こりゃしないわ。

オレグ でもママの夢だったじゃないか！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私の夢は、あなたと一緒にピラミッドを観に行くことなの！ 私
はあなたがいけないのに、行きたいとは思わないわ！ 私はあなたと離れたくないの。

オレグ たった7日間じゃないか！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私、あなたが仕事から帰ってくるのを、いつも待ちわびている
のよ。部屋中を歩きまわって、寂しくなったり、不安になったり……たった7日間だなん
て、言うのは簡単なことでしょうけど！ どうして私、あなたの言うことを聞いて年金生
活することにしたのかしら？

オレグ エジプトの方が、ここにいるよりも、たくさん思い出ができるよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ それはどうかしらね。(いぶかしげに少し考えて) どうしてそんな
に意地を張るのよ？

オレグ 意地なんて張ってないさ……プレゼントしたいんだよ……ママが喜んでくれる夢
まで見たくらいなんだよ……まあ、仕方ないか、いやだっていうなら……

オリガ・ヤーコヴレヴナ 行くわ！

オレグ だったら、冒険だけはしないでくれよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ この年になって、冒険する癖をやめるのは難しいわね！

オレグ サラダ、食べてもいい？

オリガ・ヤーコヴレヴナ ワインをもっと飲みましょうよ！ 酔っ払うわよ！(ワインを注
ぐ)

オレグ ほんとうに知らないぞ……そんな酔っ払いで飛行機乗れるのかい？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私が飛行機を操縦するわけじゃないんだし、平気よ！(一気に飲
み干す)夢に見たんですって！ あなたって、まだまだ子供ね！ 全くびっくりさせるんだ
から！

オレグ びっくりさせるって、僕が？ どうして？

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなた、本当に生真面目な表情をしていたし、とても緊張して
いたから……

オレグ 僕が？ 全然違うよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ そうなの！ だから、私、思ったの……

オレグ 思ったって何を？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私に何か伝えたいことがあるんじゃないかって……

オレグ 伝えるって何を？

オリガ・ヤーコヴレヴナ だから、何かすごくグローバルな話よ……例えば、あなたが結婚するとか……

オレグ 僕が？ 結婚？ どうしてそう思ったの？ なんで？ 僕が生真面目な表情をしていたから？ そうなの？ (ジェスチャーを交えて) それじゃ、酔っ払うとしますか？ (再びワインをオリガ・ヤーコヴレヴナに注ぐ)乾杯の音頭をよろしく！

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなたができるだけ早く結婚できますように！ 私はね、このことをずっと夢見てきたの！

オレグ 今日という日から、ママの夢は全部叶うことになるさ。

二人、飲み干す。

オリガ・ヤーコヴレヴナ それじゃ、全くいつになったら結婚してくれるのよ？

オレグ いつも覚悟はできてるんだ！ 明日にでもね！ 次は温かい料理を食べない？

オリガ・ヤーコヴレヴナは料理を取りに席を離れる。

オレグ (彼女の後ろから)ということは、ママは望んでいるんだね、僕が……

オリガ・ヤーコヴレヴナ もう待てないと思うわ！ ラム肉と豚肉、どっちがいい？(フライパンの蓋を少し開ける)

オレグ どっちでも持ってきてくれたものでいいよ！ 明日結婚することにしよう！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 本当に、結婚しなさいよ！(鍋の蓋を少し開ける)鶏肉もあるわよ！

オレグ 鶏肉にしよう！ 結婚するよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ (彼の皿に鶏肉をのせる)誰と？

オレグ それは考えよう！ とってもエレガントな鶏肉だ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ どんな子もあなたにはお似合いよ！

オレグ そうだね、僕は引っ張りダコだ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ うちの巨大なアパートに住んでる適齢期の女性は、みんなあなたと結婚したいと思ってるわ！

オレグ コンクールでも開催しようかな！

オリガ・ヤーコヴレヴナ (始めは決まり悪そうに微笑むが、その後しゃべりだす)ところで、

一度も気になったことはないの？……(微笑む)

オレグ ママ、遠慮しないで！

オリガ・ヤーコヴレヴナ うちの真向かいに住んでる子のこと。

オレグ (鶏肉を食べる)なんてうまい鶏肉なんだ！ でもたしかその子は、結婚してるんじゃないなかったっけ？ 違った？(オリガ・ヤーコヴレヴナがラム肉を切り分けて自分の皿にのせるのを注意深く眺めている)本当は、ラム肉もいいなと思ってたんだ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 気でも狂ったの？ その人の娘のことを言ってるのよ！(ラム肉を彼の皿にもものせてあげる)さあ召し上がれ！ 若羊の肉よ！

オレグ ああ、あの……すごく足の長い子ね！ 夕方に彼女を見かけると、竹馬に乗ってるみたいなの！ でも、彼女は若すぎるなあ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ あの子の妹のことよ……足の長さは普通の方……(オレグがラム肉を試食するのをじっと見ている)どうかしら？

オレグ うまいよ！ でもあの子はたしかまだ小学生じゃない？ それはちょっとリスクーだな！ 足なんか、まだまだ立派に伸びるかもしれない！

オリガ・ヤーコヴレヴナ あの子は大学生よ！ もっと足す？

オレグ いや、もういいよ！ 僕は若い子好みの年寄りにはまだなっていないんだけど……僕はどっちかっていうと、同年代か……年上でもいいかなって……

オリガ・ヤーコヴレヴナ 女性のこと、全くわかってないのね！

オレグ 全然わかってないさ！ でもだからといって、結婚できないってことではないよね！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 豚肉も足そうか？

オレグ もうお腹いっぱいだ。ママ、ありがとう。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 次はケーキにしましょう！ じゃあ、あなた、こんな子がいいって言う人はいるの？

オレグ (ケーキのことを言う)ただ目移りばかりしちゃうんだな！

オリガ・ヤーコヴレヴナ そういえば覚えてる？ あなた、牛みたいな目をしたのっぽの子を連れてきたことがあったわよね？

オレグ 僕が？ ママのエクレア、すごく上手に焼けたみたいだね！ まあ、いつものことだけど。

オリガ・ヤーコヴレヴナ あの子、私にまわりついて、私のエクレアのレシピ、教えてくれってせがんだのだったわ！

オレグ でも、ママは警戒心を解かなかったよね！

オリガ・ヤーコヴレヴナ あの子、あなたのためだったら仕事のキャリアを犠牲にしてもいいって、言ってたわ。

オレグ あの子が言った仕事のキャリアって何のことだったっけ？

オリガ・ヤーコヴレヴナ スターになることだったでしょう！ 紅茶とコーヒー、どっち

にする？

オレグ そんな犠牲を払われちゃ困るなあ！ コーヒー、ちょうだい。結局彼女はキャリアの方、うまくいったのだったけ？

オリガ・ヤーコヴレヴナ キャリアは無事犠牲にできたみたいね。でもそれは他の男性のためだったけど！

オレグ コーヒー、そんなに濃くしないでね。彼女のキャリアが僕の良心に重くのしかからなくて本当によかった。

オリガ・ヤーコヴレヴナ そんなことはどうでもいいの。でも覚えてるかしら、あの時、あんな子と結婚しちゃだめよって、あなたを一晩中説得したわよね！

オレグ ママが 100 パーセント正しかったよ！ 今になってやっとわかった！

オリガ・ヤーコヴレヴナ ところで、今日はあなた、深夜にどこにいたの？

オレグ (咳き込んで) コーヒー、アチチ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 別に答えなくてもいいのよ！

オレグ 故障したって連絡があったから！

オリガ・ヤーコヴレヴナ よかったら、その故障先の子、連れてきてくれる？ 紹介してくれるわよね？

オレグ ママ、ピラミッドが待ってるよ！(大きなカバンを彼女に渡す)

オリガ・ヤーコヴレヴナ ああ、私ったら何してたのかしら？！ きっと夏服がいるわよね？

オレグ あっちも冬だけどね。30度近くあるよ……暑いだろうね！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 水着もいるわよね？

オレグ 紅海があるからね！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 水着は中二階にあるんだったわ！

オレグ (雑誌を置くための小さな机を引っ張り出し、そこに 2 段だけ階段のついた背もたれのない腰掛椅子を据える)よし、探し出そう！

オリガ・ヤーコヴレヴナ (よじ登って、中二階の扉を開け放つ)水着はどこだったかしら？(探す)覚えてる？ あなた、旦那さんのいる女性とつきあったりもしたわよね？ (折りたたみ傘を投げて)持ってて！

オレグ 彼女の結婚生活は、危機に瀕していたからね！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 今でもそうみたいね。なのに、3人目の子供ができたっていうじゃない！

オレグ それは参りました！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 水着はどこだったかしら？ これも持ってて！(つばの広い鮮やかな色の麦藁帽子を投げて)あと、こんなこともあったわね、あなた、車椅子に乗ったかわいそうな子と結婚したいって言ったことも。そのときは、結婚というのは哀れみの気持ちからするものじゃないのよ、ってあなたを説得したのだったわ！

オレグは無意識に麦藁帽子をかぶる。

オリガ・ヤーコヴレヴナ（夏服の袖なしワンピースを投げると、彼の肩に落ちる）これも受け取って！ 私の言うことを聞いて正しかったって、今ようやくわかったでしょう？

オレグ（放心状態で）ママの言うこと、聞かなかったんだ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ どういうこと？

オレグ 彼女にプロポーズしちゃった。

オリガ・ヤーコヴレヴナ それでどうなったの？

オレグ 断られた。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 誰に？

オレグ 彼女に。

オリガ・ヤーコヴレヴナ なんということ！ どうして？

オレグ 他の人を愛しているって言われた。

オリガ・ヤーコヴレヴナ まあほんとに！ でも、そういうこともあるわね。

オレグ 僕の心は傷だらけだった……。

オリガ・ヤーコヴレヴナ もう傷は癒えたんでしょう？

オレグ 1つだけある疑惑があるせいで、つらいんだ……。

オリガ・ヤーコヴレヴナ（固まる）疑惑？

オレグ 僕があまりに純粹すぎて……

オリガ・ヤーコヴレヴナ（緊張して）それで？

オレグ もしかしたら、彼女、本当は僕を騙したんじゃないかって……

オリガ・ヤーコヴレヴナ 騙した？

オレグ 彼女なりの気高さだよ、結婚をあきらめてもらうための口実さ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 理解できないわ！

オレグ（不意に厳粛な口調になって）ママ、どうしてわからないのさ？ 彼女は僕と結婚して、僕の重荷になるのが怖かったんだよ。でも、今となってはもう何も確認することができないんだ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ（間を置いて）冥福を祈ってあげましょう！ 良い子だったわ。話を蒸し返すのはやめておきましょう！

オレグ 彼女が亡くなった後、ママに対する態度がすっかり変わってしまったんだ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ（かなり調子が狂った様子で）えーっと……あの……それはどういうこと？

オレグ ママが僕にとって、もっと身近に感じられるようになったってこと。

オリガ・ヤーコヴレヴナ（安堵した様子で）そうなの……。

オレグ 僕、わかったんだよ、ママがどれだけつらい思いをしたか……パパが事故で亡く

なったときにね……。

オリガ・ヤーコヴレヴナ そのことはやめましょう。ずっと昔のことだから！

オレグ ママなんかには比べたら、僕は本当に弱い人間だから、恥ずかしいよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ その時に私がもしもあなたのことをわかってあげていたら……

オレグ 何も変わらなかったよ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなたに結婚なんかやめなさい、って説得しなかった！

オレグ 自分を責めないで！

オリガ・ヤーコヴレヴナ ほら、水着があった！ 試着してみないと！（ブラウスの上に直接ビキニの上をつけて、ビキニの下は服の上に当てる）どう、似合う？

オレグは彼女を見ているが、何か自分のことを考えている。

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなたが結婚したい人としたらいいのよ！ 私はいろいろ忠告してあなたにまとりつくようなことは絶対にしないから！

オレグ 了解、ママ！ 結婚するよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなたの子供が産まれてくれたらって、心から願っているの…
…

オレグ（話を遮って）了解！ 産まれるよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ どうかしら？

オレグ 何が？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 水着のことよ！

オレグ よく大事に取ってあったよね！ この水着、僕が小さいときからずっと覚えてるよ。でも、この水着しか持ってないの？

オリガ・ヤーコヴレヴナ それでどうなのよ？ ぴったり？ まあまあ？

オレグ まあ、何かもう1つ水着があってもいいかなって……

オリガ・ヤーコヴレヴナ（思いに耽って、夢見がちに）私、あなたの将来の奥さんのことをよく想像してみたりするのよ……

オレグ へえ！ いいかな、この水着なんだけど、ちょっとレトロっていうか、珍しいっていうか、他にみたことがないような……つまり、実際に着るものって言うよりも、骨董品ってところかなあ……

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私が想像するのはね、わかるかしら、現代的な子じゃなくて…
…若くて、おとなしくて、はみかみやさんで……例えば幼稚園の先生とか小学校の先生とか……もしも何かできないことがあっても、たいしたことじゃないわ……私が面倒を見てあげるし、アドバイスもしてあげるから……料理や片付け、あなたのシャツのアイロンがけも教えてあげるし……（夏用ワンピースをもう1着投げる）私の娘になってくれるような子がいいわ……ほら、ちゃんと受け取って！ これも役に立つはず！ 私はね、ツルゲーネ

フの小説に出てくるような子がいいの³……

オレグ（放心状態で）僕は、ツルゲーネフの小説のような子は好きじゃないんだ……自分の奥さんがずっと不機嫌でいるのって、気持ちのいいもんじゃないし……

オリガ・ヤーコヴレヴナ でも私は、そういうフェミニストが嫌いなの。フェミニストって、自分たちは賢いけど、それ以外はバカばかりって思ってるでしょう……

オレグ そうだね、ママ。フェミニズムっていうのは……僕達男性に罰を与える神様の鞭みたいなもんだ……

オリガ・ヤーコヴレヴナ 大声で公然とセックスのことを論じたりして、恥じらいってものがいつもないのよ！

オレグ そうだね、セックスのことは、必要ないよね……

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私、時々胸騒ぎがして眠れないことがあるの、もしも突然あなたがそういう女性と結婚することになっちゃったらって！

オレグ 僕が？ そういう女性と？ 突然？ 絶対ないって！ ぐっすり眠ってよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ そういう女性たちってだいたい既婚歴があるものなのよ！ そのせいでどれだけの男性が自分の人生をダメにしてしまっていることか、わかる？ そうなってしまったら、何も得るべきものはないのよ！

ベルの音。

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなた、誰か呼んだの？

オレグ ママが誰か呼んだのかと思った。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 違うわ！

オレグ じっとしてて、僕が開けるから。（急いでドアを開ける）

エーリャがやって来る。彼女はかなり体格がよく、太っていて、そう若くはない女性。魅力的な女性には全く見えない。毛皮のコートを着ているが、帽子はかぶっていない。マフラーで頭をなんとか覆っている。毛皮のコートの袖の部分が窮屈そうに伸びきっている。彼女は買い物袋と花を何とか抱えている。アパートに入ると、すぐにそれらを床に落とし、オレグの胸に倒れ込む。

エーリャ たどり着けないんじゃないかと思った！

オレグ（彼女を抱きしめて）僕のエルフちゃん！ どうやってここまでたどり着けたの？ もう深夜じゃないか！ 雪も降ってるし、道は凍結してたでしょう！

エーリャ 歩いてきた。

³ ここでいうツルゲーネフの小説に出てくるような子というのは、プトゥーシキナによれば、『貴族の巣』のヒロイン、リーザのような女性を指している。

オレグ あんな遠くから！

エーリャ 車で行こうとしたんだけど、ガソリンの臭いで吐きそうになっちゃって。2時間歩いたよ。外の空気は綺麗だし、雪も白いんだけど、すごく寒かった。それに道がツルツルで！ 転んじやった。

オレグ 転んだの？

エーリャ 大丈夫！ ただ膝小僧を強くぶつけただけ……

オレグ 早く入って！

エーリャ ママに言ってくれた？

オレグ だいたい言ったよ。半分くらい。

エーリャ 半分？ それはどのくらいまで？

オレグ 明日結婚するって言ったよ。でも誰と結婚するかはまだ言ってない。

エーリャ それで、ママはどんな感じだった？

オレグ とっても喜んでいたよ。当たり前じゃないか！

エーリャ (手を叩いて)やったあ！ ということは、私ちょうど良い時に来たってことだね？ ドキドキしてきた。私を見て気絶しないといいけど。もっとちゃんとした恰好のときもあったんだけどな。

オレグ 僕はどんな恰好でも大好きだよ！

エーリャ そう言ってくれたら何より。あとは、熱い紅茶が飲みたいな。すごく熱いやつ。

オレグ さあ、早く入って！ かわいそうな膝小僧を見てあげよう！

エーリャ (部屋に入っていくが、中二階にいるオリガ・ヤーコヴレヴナのことは、すぐには気がつかない。)このくそみたいな寒さ、全く腹が立つ！ それに、このくそみたいな氷も！ 全く、くそみたいな氷の上でくそみたいな牛になった気分だよ、酔っ払いのくそみたいにふらふらしちゃって！

オレグ (上の方を指さして)紹介するよ！ 僕のママだよ！

エーリャ (頭を上げて、彼女を見ると、口調を即座に変えて)なんて素晴らしいお天気でしょう！ お散歩したくなっちゃったわ！

オリガ (驚いた様子で)こんばんは！

エーリャ (近づいて、手を上に差し出して)私、ここです！

オリガ・ヤーコヴレヴナ お会いできて嬉しいわ！ オリガ・ヤーコヴレヴナと申します！ (彼女の方に手を差し出すと同時に落ちてしまう)

オレグはなんとか彼女を受け止める。

エーリャ (神経質そうな笑いを込めて)やっぱり、あなたのママ、落ちちゃった！

オレグ ママ、エーリャは凍えちゃったんだって、しかも怪我しちゃって。(エーリャを椅子に座らせ、なんとかブーツを引っ張って脱がす)これは足っていうより、鶏のもも肉みた

いだな！（自分自身に言い聞かせて）さて！ 急いでヨードと包帯だ！ それからすごく熱い紅茶！（部屋を出る）

オリガ・ヤーコヴレヴナ（床に置いてあるワンピースをかき集め、カバンにしまう）今日はオレグの誕生日なの。一緒にお祝いしましょう！

エーリャ それで、仮面舞踏会でも開くことにしたんですか？

オリガ・ヤーコヴレヴナ ああ、水着は……これはただ試着しようとしただけなの！

エーリャ でも、今は2月ですよ……なんでもあらかじめ準備するのが好きなんですか？ そうでしょう？

オリガ・ヤーコヴレヴナ そういうわけじゃないわ！ 私の息子がすごいニュースをね、思いがけない、意外なプレゼントをしてくれたものだから……

エーリャ そんなに思いがけないことだったんですか？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私が若い頃、娘時代からずっと夢見ていたことだったの……

エーリャ 娘の時から？ やっぱり、何でもあらかじめ準備していらっしゃるんですね……

オリガ・ヤーコヴレヴナ ……私すごくドキドキしちゃって……気が少し変になってしまったほどだったの……

エーリャ オレグったら、なかなかお母さんにしゃべってくれないものだから……

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなた、わかっていらっしゃるんでしょう？

エーリャ 私がいないとどうにもならないし！

オリガ・ヤーコヴレヴナ いつかこんなことが起こるなんて、考えたことなかったし、予想もしてなかったのよ！

エーリャ だいたいどんな息子さんも、遅かれ早かれ、自分のお母さんにこういう思いがけないプレゼントをするものですよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ どんな息子もですって？ そんな風におっしゃらないで！ こういうことができるのはうちのオレグだけです！

オレグ（戻ってきて）包帯とヨード、持って来たよ！（エーリャのズボンとストッキングを引っ張る）

オリガ・ヤーコヴレヴナはひどく当惑した様子で眺めている。

オレグ（足を見て）これはひどい、ひどすぎる！ よくもここまでたどり着けたよな！

エーリャ やだ、やめて、お願いだから！

オレグ ダメだよ！

エーリャ 私の足を返してよ！

オレグ 頑張れ！（ヨードを塗る）

エーリャは金切り声を上げる。オレグは彼女の足に息を吹きかける。

オレグ ほらもう大丈夫！ そのままにしておいて、足を失いたくないだろう？

オリガ・ヤーコヴレヴナ (急に気がついてはっとする)私ったら、何をぼんやりしてたのかしら！ もう4時間後には出かけないといけないのに、まだ準備できてないわ！

エーリャ 4時間後ってどういうこと？ オレグ、どうして私がいないうちに2人で決めてしまおうとするの？ 私はまだ覚悟ができてないよ……時間がほしいな、たくさん！ 明後日ってというのはどうかな。とにかく大きな出来事だし……何を着たらいいか、わからないしね！

オリガ・ヤーコヴレヴナ たしかに信じられない出来事だわ！ほんとに突然のことだから！ 私も何を着たらいいか、わからないわ！ でも水着が見つかったのはよかったわ。

エーリャ ひょっとして、水着を着るおつもりですか？ あなたって、とても変わった方ですね、本当に……

オリガ・ヤーコヴレヴナ 変わってる？ 私が？ そんな風に思ったことはないけど……ちょっといいかしら、あなたがひょっとして？

エーリャ そうです、私です。

オリガ・ヤーコヴレヴナ どうしてすぐに気がつかなかったのしら？！ ということは、あなたが……

エーリャ その通りです、私が……

オリガ・ヤーコヴレヴナ そうよね、もちろん、そうじゃないと、何が何だかさっぱり理解できないわ……つまり、あなたが……なんていうプレゼントかしら！(突然、エーリャを軽く抱きしめて)とっても、とっても嬉しいわ！ 私、なぜだか不安でしかたなかったものだから……つまり、あなたなのよね？

エーリャ そうです！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私と一緒に旅行してくれるのは？

エーリャ 旅行？ 面白いことをおっしゃいますね……

オリガ・ヤーコヴレヴナ ご一緒にピラミッドまで旅行してくださるのよね？

エーリャ ピラミッドまで旅行？ なんとなく分かるような……いや、さっぱり分からない……あまりに比喩的におっしゃるので私にはさっぱり。ピラミッドっていうのは？

オリガ・ヤーコヴレヴナ (少し驚き、エーリャから離れて)ピラミッドがどういうものかって？ クフ王のピラミッドとか……

オレグ 僕がママにエジプト旅行をプレゼントしてあげたんだよ！

エーリャ (座ったまま、彼を足で蹴飛ばそうとする)あなた、ママをエジプトに行かせるの？

オレグ (彼女の足を捕まえて)傷の回りも塗っておこう！

エーリャは金切り声を上げる。

オレグ あともうちょっと我慢して！ 飛行機は4時間後に出発なんだ。ちゃーんと全部……塗っておいてあげたよ。

エーリャ アレルギー反応がもう出てきた！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 飛行機のアレルギー？

エーリャ ヨードのアレルギーです！

オリガ・ヤーコヴレヴナ よくわからないけど、あなたが飛行機に乗ってくださるのよね？

エーリャ 乗ったとしても、たぶん、違う行き先だと思います！

オリガ・ヤーコヴレヴナ それはもったいないわ！ 一緒に日焼けしましょう！ どうやら、このビキニ、色あせてしまったみたいね。あなたはどう思われる？ このビキニで浜辺に出かけても恥ずかしくないかしら？

エーリャ それより、ビキニをつけないで出かけた方がいいですよ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 何もつけなくて？

エーリャ 何も！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 何もつけなくて？ 浜辺で？ ということはどういうこと？

エーリャ 私なんか、いつもビキニなんてつけなくて焼いてますよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 何もつけなくて……？ あなたが？ でもどうして？

エーリャ きれいに焼くためですよ。私、バストに自信がありますから！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 自信がある……それに？ あとは自信があるところはあるのかしら？

エーリャ ヒップも！ いいお尻でしょ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなた、本当に……何も……何もつけずに焼いていらっしやるの？

エーリャ その時の気分にもよりますけどね！

オリガ・ヤーコヴレヴナ でも、あなたのお年で……つまり、3歳を過ぎたら、何もつけずに焼くのはやめたほうがいいんじゃないかと思うのですけど……つまり、人前で焼く場合はね。

エーリャ どうして？

オレグは彼女の足に包帯を巻く。

エーリャ (オレグに)そんなにきつく巻かないでよ！ 痛いよ！

オレグ よくなるように、全力でやってあげてるんだよ……ミイラみたいにしてあげよう！

エーリャ (オレグに)私の服を脱がせて！ (オリガ・ヤーコヴレヴナに)そんな風に見ない

てくださいよ！ 私、コートのことを言ったんです！

オリガ・ヤーコヴレヴナ しゃれたことをおっしゃるわね！

オレグ (エーリャに)コート、取ったよ！ テーブルの方に君を運んであげよう！

エーリャ お肉がたくさん！(吐きそうになりながら)あなたがた、いつもこんなにたくさん食べるの？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 今日は誕生日ですからね！

エーリャ そういえばプレゼント！ それに花束も！ 玄関のあたりに転がってるはず…
…

オレグ 座ってて、座ってて、持って来るから！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 転がってる？

エーリャ 私が落としちゃったから。

オレグが持ってきて、エーリャに渡す。

オレグ これでよし。

エーリャ (すぐに袋を彼に手渡そうとして)プレゼント！

オレグ シャツとネクタイだ。かっこいいね！

オリガ・ヤーコヴレヴナ あんまり見ない柄ね！

エーリャ 今着てる、センスがあまりになさすぎる、そのけばいシャツを脱いで、こっちを着てみてよ。

オレグ もう着替えてるところさ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ でも……

エーリャ (オリガ・ヤーコヴレヴナに)あなたにはバラを差し上げます！ 凍っちゃったけど！

オレグ 素晴らしい花束だね！ そうでしょ、ママ？

オリガ・ヤーコヴレヴナ ありがとう！(花束を受け取る)サラダでも召し上がる？ ほら、鮭のサラダとか？

エーリャ それは缶詰の鮭ですか？

オリガ・ヤーコヴレヴナ そうよ、鮭のエキスに漬かった鮭よ！

エーリャ (今にも吐きそうな顔で)鮭からエキスが出るなんて、ありえない……⁴

オリガ・ヤーコヴレヴナ それじゃ、トマトはいかが……

⁴ ロシアには、ブイヨンで煮た鮭の缶詰が売られており、直訳すると「鮭のジュースに漬かった鮭」という名前がついている。「鮭のジュース」という箇所を、ここでは「鮭のエキス」と訳した。ベジタリアンのエーリャにとって、鮭のエキス(「鮭のジュース」)は倫理的に許せない。ジュースは、野菜や果物を絞ってできるものであり、「鮭のジュース」という言い回しは、鮭を生き物であることを忘れさせ、植物と見なそうとする偽善に過ぎないことをエーリャはここで言っている。

エーリャ 私、つわりなんです！

オリガ・ヤーコヴレヴナ つわりですって？ つわりってというのは、妊娠中の女性にしかないものだと思ってたわ。それじゃ、温かい料理はいかが……(容器の蓋を開ける)鶏肉のクルミ和えよ！

オレグ 香ばしいだろう？ ママの得意料理なんだ！

エーリャ どうか、お願いですから、蓋を閉めて……片付けてください……

オリガ・ヤーコヴレヴナ (うろたえて)それじゃ、ラム肉か……あとは豚肉は？

エーリャ 便器はどこ？(飛び上がって走り去る)

オレグ あっちだよ！(彼女の後を走る)

オリガ・ヤーコヴレヴナ (1人になって)あの子、私が変わってるとも言ってたわ。

オレグ (戻ってきて)鶏肉を片付けてくれないか。エーリャが吐いちゃうから！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私の得意料理のせいで！ たった1種類の料理しかないのに！
こんなの初めてのことよ！(鶏肉を持ち去る)

エーリャが戻ってくる。

オレグ 大丈夫かい？

エーリャ たぶん……でも、そんなにもたないかも……

オレグ ママはね、ちょっと古い考えを持った女性でね、だから……ビキニのこととか、ヒップのことは…やめたほうがいいかな……(彼女を抱きしめる)そういう話題は僕達2人だけのために残しておこうよね！

エーリャ (身を引き離して)あなたのママは、まるで聖母マリアみたい、処女のままたあなたを産んだの？

オレグ 僕にはパパがちゃんといたよ。

エーリャ じゃあ、パパはどこにいったの？

オレグ パパはパイロットだったんだ。

エーリャ 運命的にうちと一緒だ！ 私のパパもパイロットだった！

オレグ ママはパパのこと、すごく愛していたんだ。

エーリャ 全く同じだ。私のママも、パイロットだったっていうパパのことすごく愛していたみたい。

オレグ その言い方、よくわからないな。

エーリャ うちのパパの飛行機が墜落しちゃって、かつこよく死んじゃったんだってさ。

オレグ 僕のパパもそうなんだ。僕がママのお腹にいるときにね。

エーリャ 全く同じだ。ひょっとして、同じ飛行機だったんじゃないかな。とはいっても、私の方が8つも年上だけど！ それで、あなたのパパは今どこに？

オレグ 彼の飛行機が墜落しちゃったから。

エーリヤ それはわかってる。本当は、今どこにいるの？

オレグ 帰ってこないところにいるよ。

エーリヤ でも、時々帰ってくることだってあるかもしれないよ。うちのパパなんて、飛行機の事故で死んだはずなのに、私がちょうど19歳の誕生日のときに帰ってきたもん。それ以来、私、自分の誕生日を祝わないことにしてる！ 帰ってきたといっても、ちょっとの間だけだったけど。その後またすぐに死んじゃったんだけど、今度は英雄的な墜落事故じゃなくて、酔っ払ったあげくに凍死。またパパのこと待ったほうがいいものなのか、訳がわからないよ！

オレグ 僕のママはパパのことをたくさん話してくれたよ。ママが愛していたのはパパのことだけで、他に好きな人は誰もいなかったって。僕だけ愛してくれたんだよ。ママは自分の人生を全て僕に捧げてくれたんだ。だから、ママは本当に聖なる人なんだ！

エーリヤ あなたのパパの写真は、もちろん残ってないんでしょう？

オレグ 残ってるさ。ママの部屋に結婚式のときの写真がかかっているよ。パパはパイロットの制服を着ていて、ママは白いドレスにパパの帽子を被ってる。結婚登録のときに、撮ってもらった写真だよ！

エーリヤ あなた、ついていたわね！

オレグ ついていた？ よくわからないな。

エーリヤ つまりね、母親は皆が皆、自分の子供に嘘をつくわけじゃないってこと。

オリガ・ヤーコヴレヴナ (戻ってきて、エーリヤに)ご気分はどう？

エーリヤ ごめんなさい、私、マナーが悪いみたいです。

オレグ お酒は勧めないからね。

エーリヤ それは無駄だよ。私、ウォッカだったら50グラムくらいはいけるのに。

オリガ・ヤーコヴレヴナ うちにはウォッカなんてありません！

エーリヤ ウォッカがないって？(オレグに)あなたはどんなことも頼りになると思ってたんだけどな。

オレグ じゃあ、買ってこようか？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 行って来て！ エジプト旅行はまた別の時にするわ！

エーリヤ ウォッカがなくても何とかなるからいいよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなた、協調性があるのね！

エーリヤ そんな風に思ったことはなかったけど、でも、たぶん、自分のこと、よくわかっていないみたいなんです。

オリガ・ヤーコヴレヴナ ポットのお湯が沸いたわ。濃い目の紅茶にしましょうか？

エーリヤ 私、緑茶しか飲まないんです。

オリガ・ヤーコヴレヴナ うちにはないのよ。

オレグ じゃあ、買ってこよう！

エーリヤ いいえ、あるものでいいです。ただ、すごく濃くて、すごく甘い紅茶がいい！

とっても甘いのを！ これでもかっていうくらい、甘いをお願いします！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 今持ってくるわ！（部屋を出る）

エーリャ いつ、ママに言ってくれる？

オレグ 今すぐに言うよ！ 言ってほしいんだよね？

エーリャ もちろん！ でも、怖い……怖い！ 怖いなあ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ ほら紅茶よ、どうぞ！

オレグ ママ！ 僕、言いたいことがあるんだ……

エーリャ （遮って）うう、すごく熱い！

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなたがそうおっしゃったから！

オレグ （再び最初から）ママ！

エーリャ （少しすすりながら、顔をしかめて、また遮る）どうしてこんなに甘いのか？

オリガ・ヤーコヴレヴナ でも、あなたが、すごく甘くっておっしゃったから……だから、木苺のジャムと蜂蜜を入れてあげたの……

オレグ（再び最初から）ママ！ 僕……

エーリャ （遮る）私、濃い目の紅茶をください、とは言ったけど、甘いとは言ってない！

オリガ・ヤーコヴレヴナ でもたしか……

オレグ ママ！ ママに言いたいことがあるんだ……

オリガ・ヤーコヴレヴナ わかりました！ 今新しいのを作り直してきます。

オレグ ママ、僕が自分でやるから！（部屋を出る）

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなた、お身体が弱いよね？

エーリャ 私が？ 頑丈ですよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ でも今はちょっと風邪気味なんじゃない？

エーリャ 私が？！ 私にもいろいろ事情はありますが、そんなのに比べたらたいしたことありません。

オリガ・ヤーコヴレヴナ お仕事は何をされていらっしゃるの？

エーリャ ドイツで中古車を買って、それを運転して運んでます。こっちで売るために！

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなたって、すごく現代的な女性ね。

エーリャ 運転が好きなんですよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 運転はお一人で？ 長い道のりでしょう！

エーリャ でも、私いつもパートナーを乗せてますから！

オリガ・ヤーコヴレヴナ ああ、なるほど……それは賢いわね。

エーリャ ドイツに行くときは、カバンの中に入れて、帰りに助手席に乗ってもらいますよ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ はあ……それで……彼は……そのことに反対しないのかしら？

エーリャ 誰がです？

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなたの彼氏よ。

エーリヤ そんなことわかりやしません。

オリガ・ヤーコヴレヴナ そういう男性と一緒になのが、いろいろと便利なんでしょうね？

エーリヤ (微笑んで) 大事なことは、私は一人で乗ってるわけじゃない、って思ってもらうことです！ 猛スピードで飛ばしたら誰もまじまじと覗かないだろうし。

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなたの彼はただそれだけの人なの？

エーリヤ 違います、彼には少しずついろいろできるように、私が手懐けたんです。私が休暇で家を空けるときは、アパートの部屋の窓辺に座ってもらうんです、そうしたら、泥棒は、うちに誰かがいるって思ってくれるでしょう。あとは、気分が悪いとき、ボクシング用のグラブをつけて、思いっきり、彼の面を殴ったりもしますよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ その彼とは知り合って長いの？

エーリヤ 去年からです。

オリガ・ヤーコヴレヴナ どこで知り合ったの？

エーリヤ ベルリンで。300ドルで買いました。

オレグ 紅茶できたよ！ そんなに甘すぎない紅茶だよ。

エーリヤ でも私、甘いのが飲みたいって言ったじゃない！

オレグ 最初、甘いのがいいって言ったけど、その後甘くないのがいいって……

エーリヤ 違う、最初とっても甘いのが欲しいっていいのに、すっごく甘すぎる紅茶だったから、だから……

オリガ・ヤーコヴレヴナ ほら砂糖よ、好きなだけ足しなさい。

エーリヤ 甘くないほうがよかったかも。どうしてそんな風に私のことを見ているんです？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私、ボクシングをやっているっていう女性、初めて見たわ。

エーリヤ 私が？ ボクシング？

オレグ ママ、どうしてそんなこと思いついたの？

オリガ・ヤーコヴレヴナ でも……私、そういう風に聞こえたんだけど……

オレグ 勘違いしたんだよ！ エーリヤはね、空手をやってるんだよ。黒帯だよ！ レンガなんて、手のひらで一発で割っちゃうんだから！

オリガ・ヤーコヴレヴナ まあ、なんて女性らしいこと！ 失礼ですが、あなた、おいくつ？

オレグ ママ！

エーリヤ 43歳です。別に隠してはいませんから。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 隠したりなんかしない方がいいわ。だって、もっと年上に思われてしまうでしょうから！

オレグ ママ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなた、オレグとはどこで知り合ったの？

エーリヤ 老人ホームで知り合ったとでも言っておきましょうか。私がトップレスで焼い

ていたら、オレグがちょうどそこに便器を設置しにきたんですよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ エーリヤみたいな女性に会ったのは生まれて初めてよ。(エーリヤに)あなたは、私から言わせれば、まるで外国人みたいだわ。

エーリヤ それはそうかもしれないですね！ あなたと私の若いころは、それぞれ別々の国の話ですから。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私は素晴らしい国で育ったの！ 素晴らしいところでね！ バレエもどんなに素晴らしかったことか！

エーリヤ でも、その当時は、ピラミッドを観に行くには、エジプト人と結婚しなければいけなかったですよ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ たしかに、行き過ぎたところもあったけれども、でも私たちは信じていたから……

エーリヤ 何を？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 『深紅の帆』⁵の話を知っていたし、大体どんなことも信じてたわ！ それじゃ、あなた方は今何を信じているの？

エーリヤ いろいろですよ。お金が私たちの時代の「深紅の帆」だって思ってる人もいますし、キリストが磔にされて、その後復活したことを信じている人もいますね。

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなたご自身は何を信じていらっしゃるの？

エーリヤ 私ですか？ いろいろですね。

オレグ ママ、ピラミッドが待ってるよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 遅れてしまうようだったら、ピラミッドに謝るわ。

エーリヤ 私が今信じていることは、人生で一番大切な愛に出会えたってことです。

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなた、結婚はまだよね？

エーリヤ 私は……ほとんど結婚していると言いたいところですけど。

オリガ・ヤーコヴレヴナ お子さんはいらして？

エーリヤ そのうち生まれるといいなって…

オリガ・ヤーコヴレヴナ 離婚したことはあるの？

エーリヤ ご覧のとおり、私、何も隠すつもりなんかありませんから……パスポートのスタンプが押されているかどうかという意味では、結婚したことはありません……

オリガ・ヤーコヴレヴナ それはどういうこと？

エーリヤ 男性と何人か付き合ったことはあります……

オリガ・ヤーコヴレヴナ 一度に？

エーリヤ 1人ずつです。私はパスポートにスタンプっていう形での正式な結婚には特に

⁵ 20世紀初頭のロシアの作家アレクサンドル・グリーン(1880-1932)の小説(1923)。ある漁村に住む貧しい少女アッソーリが、「深紅の帆の白い船に乗った王子様がいつか自分の元にやってくる」という夢を信じ続け、やがてそれが現実のものになるという、シンデレラストーリー。1961年にソ連で映画化され、多くのロシア人に愛される映画となっている。

無関心でした……それぞれの男性とは、かなり長い間いっしょにいました……でも、いつも正式に結婚の手続きを踏むところまでには至りませんでした……

オリガ・ヤーコヴレヴナ それは一体どうして？

エーリヤ 1人目は麻薬中毒の人でした……数年間かけて治してあげたんですけど……

オリガ・ヤーコヴレヴナ うまくいったの？

エーリヤ うまくいきました……でも、彼に振られてしまいました……彼からは、私を見るたびに、昔の生活を思い出してしまうと言われて……

オリガ・ヤーコヴレヴナ でも、あなたと付き合った男性すべてが、麻薬中毒のはずはないでしょう？

エーリヤ 幸いなことにそうだったんですが、2人目に付き合った人はアル中でした。でもすぐにはわからなかった。

オリガ・ヤーコヴレヴナ それじゃ、アル中だってわかってから、あなたは彼と別れたのね？

エーリヤ 助けてあげることにしたんです。

オリガ・ヤーコヴレヴナ もしかして、その時もうまくいったの？

エーリヤ はい。

オリガ・ヤーコヴレヴナ それで、また彼に振られたのね？

エーリヤ どうしてわかったんです？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 3人目の男性は、エイズにかかったなんて言わないでよ！

エーリヤ いいえ、3人目は、芸術家の人でした。とても才能のある人で、でも、なかなか運に恵まれない人でした。芸術肌の神経質な性格の人で、いろいろあって。

オリガ・ヤーコヴレヴナ それで、またあなたは彼のキャリアの手助けをしたのね？

エーリヤ すごい洞察力ですね。

オリガ・ヤーコヴレヴナ そして、彼は有名になったのね？

エーリヤ 驚いた。

オリガ・ヤーコヴレヴナ それで、また振られたのね。

エーリヤ いいえ、その時は私の方から振りました。

オリガ・ヤーコヴレヴナ でもどうして？

エーリヤ 彼が浮気をしたから！

オリガ・ヤーコヴレヴナ ひどい男！ もちろん、あなたより若い子に浮気したのよね！

エーリヤ それが、男と浮気しちゃって。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 現実の話じゃないみたい、まるで『サンタ・バーバラ』の世界ね！

エーリヤ でもその後、普通の男性と知り合ったんです。彼は私のこと、本当に普通に愛してくれて、私も彼のことを普通に愛していました。私たちが普通に暮らせたことが、私は何よりも気に入ってました……

オリガ・ヤーコヴレヴナ それで、どうして別れることになったの？

エーリャ 彼に振られたんです。

オリガ・ヤーコヴレヴナ なぜ？

エーリャ 私がこれまでの人生を彼に語ってしまったから。

オリガ・ヤーコヴレヴナ だめよ！ そんな風に軽率に振舞うべきじゃなかったのよ！

エーリャ 彼が聞いてきたから。

オリガ・ヤーコヴレヴナ そんなのは言い訳にならないわ。

エーリャ すごく愛してもらいたかったんです！

オリガ・ヤーコヴレヴナ それならなおさらよ！

エーリャ でも、私たちが別れた次の日、新しい恋人に出会えたんです！ 泣いている暇なんてなかった！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 次から次へとテンポの速いこと！

エーリャ 彼はお母さんのところにすぐに連れて行ってくれました。

オリガ・ヤーコヴレヴナ でも、どうして？

エーリャ 紹介してくれるっていうから。

オリガ・ヤーコヴレヴナ ということは、パスポートのスタンプまでついにとあと一歩、というところまでいったのね？

エーリャ その通りです！

オリガ・ヤーコヴレヴナ それで今度はどうしてうまくいかなかったの？

エーリャ 自分のことを彼のお母さんに話したんです。正直に。今私があなたにしているみたいにです。

オリガ・ヤーコヴレヴナ きっと、そのお母さん、かなりの衝撃だったんじゃないかしら？

エーリャ また見事に当たりです！ お母さんは私のこと気に入ってくれませんでした。

オリガ・ヤーコヴレヴナ よくわかるわ。

エーリャ 私、とにかくすごく幸せになりたいんです。だから、結婚したいと思う相手のことは、気がおかしくなるほど愛してしまうんです。

オリガ・ヤーコヴレヴナ それはお母さんに気に入ってくれなかった彼のことね？

エーリャ いいえ！ 今言ってるのは、別の彼のことです。ようやく、生涯の伴侶に出会えたと思いました！

オリガ・ヤーコヴレヴナ その彼はみなしごだったの？

エーリャ いいえ、残念ながら。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 彼のお母さんには正直に話しすぎないことよ。

エーリャ それはどうして？

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなたには息子がいないから、理解できないでしょうけど。

エーリャ 将来の旦那さんのお母さんのことまで理解しなきゃいけないなんて、私には難しいですよ。でも、そのお母さんの方が、私のことを理解しやすいはず。だって、彼女だ

ってかつてはお母さんじゃなかったのだし、息子のことだけを愛したわけじゃない。過ちだって犯したかもしれないじゃないですか……

オリガ・ヤーコヴレヴナ　どんなお母さんも、自分の息子があなたとなら幸せになれるなんて信じやしないわ。私は、それがもつとなことだとは言わないけど、でも……そんな風に正直すぎてはいけないわ。これは私からのアドバイスよ。

エーリャ　でも、息子の方が私の過去を責めないのに、どうして今度はお母さんの方が受け入れてくれないんでしょう？　だって、私、彼を裏切ったわけでもないし、彼のお金を盗んだわけじゃない、彼のためだと思って助けてあげたのに……ただ、私自身がどうしても幸せになれないんです……

オリガ・ヤーコヴレヴナ　それなら、あなた自身が幸せになれないのに、どうやって他の人を幸せにしてあげようと思っていらっしゃるの？

オレグ　ママ！　エーリャの良いところはね、あまりに良い人すぎることなんだ。ほら、カバンだよ。荷物、僕がまとめられる分だけ入れておいたから。ピラミッドが待ってるよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ　ああ！　そうだったわ！　でも……片付けてないわ！　今、すぐに片付けるから！

オレグ　遅れるよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ　でも、こんなめちゃくちゃなままにしておけないわ！

エーリャ　それはご心配なく！　私が片付けておきますから！（食器を集めて、キッチンに急いで片付けるが、すぐさまガチャンという音が聞こえてくる。）

オリガ・ヤーコヴレヴナ　説明してちょうだい、どうしてあの子を呼んだの？

オレグは曖昧に手を左右に広げる。

エーリャ（すぐに、両手に割れた花の鉢を持って現れる。）心配はご無用ですよ！　これ、なんだか色あせた花ですよ……たぶん、この花のこと、だいぶ前に忘れていらしたんじゃないですか、私が振り返ったら、ちょうどこれが……それで……こんな感じに……

オリガ・ヤーコヴレヴナ（彼女の手から奪い取って）私のゴムの木！　35歳なのに！

オレグ　ママ、そのゴムの木はもう十分生きてくれたじゃない……

オリガ・ヤーコヴレヴナ　早く！　何か入れるものをちょうだい！　鍋でも何でもいいから！

オレグがすぐに鍋を持ってくる。エーリャは彼らから離れて、脇に座る。

オリガ・ヤーコヴレヴナ（植物にかかりきりになっている）私、もうどこにも行かないわ！

オレグ　ママ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ　何がママよ？　土を集めてよ！

オレグは姿を消す。

オリガ・ヤーコヴレヴナ (鍋に注意深く花を置いて)かわいそうに、もう少しの辛抱だからね！

オレグ (スコップを持ってきて)きれいに埋めてあげたほうがいいよ！ そんなに動揺しないで！ 明日すぐに新しい鉢を買って、丁寧に植え替えてあげるよ、約束するから……このゴムの木、身体障害者になっちゃうね！

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなたが生まれたとき、私は、家を建てて、木を植えて、井戸を掘ってあげたかったの。でも私はできる限りのことしかできなかった、それがゴムの木を植えることだったのよ……アパートはあなたが買ってくれたから……

オレグ そしたら、井戸はママが帰ってくるころまでに作っておくよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ オレグ！

オレグ ちゃんと約束するよ、絶対に死なせないから！ 僕はセンチメンタルな人間なんだ。ママに似たんだよ！(彼女にすばやく毛皮のコートを手渡す)ピラミッドが待ってるよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ これは私のコートじゃないわ！ エーリャに渡しなさい！ 急ぎなさい！ 空港に行く途中でエーリャを送って行ってあげましょう。(急いで自分のコートを着る)

オレグはコートを両手に持ったまま、エーリャの脇に立っている。

オリガ・ヤーコヴレヴナ オレグ！ 何をぼおっと突っ立ってるの？

オレグ しーっ……エーリャが寝ちゃった……(そっとコートを床に置き、エーリャの手を取る)

オリガ・ヤーコヴレヴナ 何をしてるの？ そんな重いもの！ そのまま持ち上げずに起こしなさいよ！

オレグ しーっ……(彼女を部屋まで運んであげる)

オリガ・ヤーコヴレヴナ どこに連れて行くの？

オレグ しーっ……僕が戻るまで、寝かしておいてあげようよ……彼女、ストレスを抱えているから……

オリガ・ヤーコヴレヴナ (すぐ続けて)彼女がストレス？ 私の方がストレスだわ！

オレグ しーっ……(寝室に消える)

オリガ・ヤーコヴレヴナは少し考えて、花を上部に置く。

オレグ (部屋に入ってきて)ママ、何をしてるの？

オリガ・ヤーコヴレヴナ こっちの方が安全だと思うの！ ただ、彼女がここにいる限りは、どこが安全かなんて全くわかったもんじゃないけど。

オレグ ピラミッドが待ってるよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ やっぱり、彼女を起こしましょうよ！

オレグ ママ、それはかわいそうだよ！ ぐっすり寝てもらおうよ、疲れてるんだから！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 自分のうちでぐっすり寝てもらうことはできないの？

オレグ ママ、こんな些細なことで疲れたエルフちゃんのことを嫌がらなくてもいいじゃない？

オリガ・ヤーコヴレヴナ あの子、エルフっていうの？ まるで危篤の人の耳元で太鼓をドンドン鳴らすみたいにお似合いな名前なこと！⁶

オレグ ピラミッドが待ってるよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 彼女はどうかやら結婚しようとしているみたいじゃない？

オレグ そうかな？

オリガ・ヤーコヴレヴナ ずっとそのことばかり話していたわよ！

オレグ 気にならなかったけど。まあ、そう話していたのたら、そうかも……それがどうかしたの？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 何でもないわ！ ただちょっと興味があっただけ……あの子と結婚しようとしてる絶望的な男性は、どんな人間なのかしら！ 見てみたいものだわ！ 私はあの子の将来のしゅうとめのこと、羨ましいとは思わないけど！

オレグ どうして？

オリガ・ヤーコヴレヴナ だって、あの子、普段の生活では規則だとかノルマとか、秩序ってものがあることがわかってないのよ。そういう妥協を知らない人たちとなら、仮に一緒にスパイ活動をしなさいって言われても、できるけど。でも、結婚というのは、スパイ活動を一緒にするためにするものじゃないわ！

オレグ ママ、ママの人生は全く素晴らしいの一言に尽きるよ。僕にはママが聖なる女性にしか見えない。

オリガ・ヤーコヴレヴナ (うれしそうに) 言いすぎよ！

オレグ ママのこと、誇りに思うし、うっとりするぐらいだよ！ でもね、高みからあまり厳しくあれこれ咎めないほうがいいよ。だって誠意とか率直な心っていうのは、まだまだ評価されたっていいんだから！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 喧嘩はやめましょう！ 彼女とは、子供の洗礼と一緒に立ち会う間柄のように親しい関係じゃないし！ 空港から帰ったらすぐのうちまで送ってあげるのよ！ 目を覚ましたらすぐに！ わかった？

⁶ エルフとは、ゲルマン・スカンジナビア伝説で空中・地中・森の中・人家などに住むとされるいたずらな小妖精のこと。ここでオリガは、エルフという名前とのギャップがあまりにかけ離れていることを皮肉っぽく語っている。

オレグ ママ、もっと高尚なことを考えたほうがいいよ！ ピラミッドが待ってるんだから！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 早くピラミッドを観に行きたいわ！（彼の頬にキスをして）あなたはこの世で本当に素晴らしい息子だわ！ 出発前にちょっとだけ一休みしましょう！

第2幕

オレグとオリガ・ヤーコヴレヴナのアパートのドアの前。

オレグは両手にカバンを2つ持っている。一つはオリガ・ヤーコヴレヴナが出かけたときに持っていたもので、もう一つはすごく古そうなカバンで、持ち手の部分が束ねられている。オリガ・ヤーコヴレヴナの隣にマイヤ・イワーノヴナがいる。彼女たちはベドゥイン人⁷の白い帽子を被っている。オリガ・ヤーコヴレヴナは傘を、マイヤ・イワーノヴナは買い物袋を持っている。二人とも冬のコートを着ているが、前の部分はボタンをはめずに開けたままで、車から出てきたばかりであることがわかる。

オレグがカバンを置き、ドアの鍵を開ける。

オレグ どうぞ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ（マイヤ・イワーノヴナに）さあ、どうぞ！

マイヤ・イワーノヴナ（入るつもりでいるが、突然後ずさりして）まあ……どうでしょう……やっぱり、やめます……

オリガ・ヤーコヴレヴナ マイヤ・イワーノヴナ、お願いですから……

マイヤ・イワーノヴナ 窮屈な思いをさせていただきますから……

オリガ・ヤーコヴレヴナ マイヤ・イワーノヴナ、何を突然おっしゃるの？

マイヤ・イワーノヴナ やっぱりホテルに泊まったほうがよいかしら？

オリガ・ヤーコヴレヴナ そんな、久しぶりにお友達ができたっていうのに……あなたが泊まれる場所なんて、すぐに作れますから！

マイヤ それは申し訳ないわ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ そんなお気遣いなさらないで！ あなたはぜひともお招きしたいお客さまなんですから！ あなたがチェリャービンスク行きの列車に乗り遅れてしまって、とても嬉しいんですよ。

マイヤ・イワーノヴナ いえ、やっぱり私ホテルに……

オリガ・ヤーコヴレヴナ 絶対にダメです！ 私たちのせいで列車に乗り遅れてしまったんですから！

⁷ アラブの遊牧民。

マイヤ・イワーノヴナ (動揺しながらさえぎって)あなたがたのせいなんかじゃありません、違いますよ！ あれは飛行機が遅れたせいで、それに……そもそも……どっちがモスクワ時間でどっちがエジプト時間なんだか……私の時計が1時間早いのか、11時間遅れているのか、訳がわからなくなってしまったものですから……

オリガ・ヤーコヴレヴナ もしもオレグが……

オレグ (マイヤ・イワーノヴナに)全く、馬鹿げた結果になってしまって。明日、すぐに列車のチケットを取ってあげますから……駅までお送りします……僕のせいで、気分を害されていないといいのですが。

マイヤ・イワーノヴナ 何をおっしゃるの？ 全く正反対ですよ！ 私、とっても、とっても……実はここモスクワに……

オレグ ほら、ごらんよ、ママ。マイヤ・イワーノヴナは全然気にしてないし、とってもとっても嬉しいって！ こういう運命だったんだよ！ 明日どこか一緒に出かけたらどうですか……

オリガ・ヤーコヴレヴナ でも、明日まで階段のところにこんな風に立ってるわけにはいかないわよね？

オレグ (持ち物をアパートに持って行って、覗き込む)マイヤ・イワーノヴナ、あなたの持ち物、すでに僕たちのアパートにありますからね！

マイヤ・イワーノヴナ (躊躇して)お二人にご面倒をおかけしたくないんです……

オリガ・ヤーコヴレヴナ マイヤ・イワーノヴナ！ やっぱり、私たち、あなたを怒らせてしまうようなことがありました？

マイヤ・イワーノヴナ (おどおどして)何をおっしゃるの、とんでもない！ ただ、お客さんどころじゃないのかと思って……オーレンカ・ヤーコヴレヴナ、あなた、何か不安そうなんですもの……

オリガ・ヤーコヴレヴナ 不安そう？ 私が？ どうしてそんな風に？

マイヤ・イワーノヴナ なんとなくそう……

オリガ・ヤーコヴレヴナ そうよ、不安だわ……

オレグ なんて？

オリガ・ヤーコヴレヴナ わからない……でも、不安だわ。マイヤ・イワーノヴナ、あなたのお気遣いにずっと驚きっぱなしなんですもの！ だから不安なのは確かよ！

オレグ 気候も変わったしね。ほらこちらに、それとも、階段の方に椅子、出した方がいいですか？

オリガ・ヤーコヴレヴナ マイヤ・イワーノヴナ、ほら、どうぞ……

皆、アパートの部屋に入る。オレグが玄関の照明をつける。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 本当にどうして私、こんなに不安なのかしら？ 年のせいね。

オレグ (マイヤ・イワーノヴナに) コート、よろしいですか？ (上着を彼女から受け取って、壁にかけ、ママの方を振り返る) ママ？

マイヤ・イワーノヴナはスフィンクスの絵が入った T シャツを着ている。

オリガ・ヤーコヴレヴナ (突然叫ぶ) イチジク！！！！

オレグ イチジク？

オリガ・ヤーコヴレヴナ マイヤ・イワーノヴナは干しイチジクのせいで、乗り遅れたのよ！

オレグ 道路が凍結していたからだよ。

マイヤ・イワーノヴナ そうですよ、道路が凍結していたからです……だから、オレグがゆっくり運転してくれてよかったんですよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 違うわ、あなた、かなり飛ばしていたし、ずっといらいらしていたから、あれ以上スピードを上げて運転しちゃいけなかったのよ……それに、もしもお店になんか寄ってなかったら……

マイヤ・イワーノヴナ お店には行かないといけませんよ！ 私は列車に乗り遅れて、嬉しいんです、すごく嬉しいですよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ イチジクだわ、私が不安になっていた原因は。すべてイチジクのせいよ！

オレグ ママ、エジプト旅行から帰ってきたら、今度は毛皮のコートで部屋を歩き回るつもり？

オリガ・ヤーコヴレヴナ (無意識に彼にコートを投げ渡して、イチジクの原因を暴こうと話し出す) あなた、今までイチジクなんかに興味を持ったことはなかったわよね！ (ワンピース姿になる。ワンピースの前面にはピラミッドが、背中には「幸せの鍵」が描かれている)

マイヤ・イワーノヴナ オーレンカ・イワーノヴナ、私、列車に乗り遅れて本当に嬉しいのよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私の目の前に突然イチジク気ちがいが現れたの！

オレグ ママ、それは大げさだよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなた、空港に迎えに来るときも、イチジクが欲しくてお店を探し回ったって言ってたわよね！

マイヤ・イワーノヴナ そういうことはよくありますよ！ 私も昔、こんなことがあったんですよ！ 夫と公園で散歩をしたときに、私ったら人前で、足みたいな枝を思わずかじってしまったことがあって……⁸

⁸ ここで使われている「枝」という意味の単語 *lapa* は、人間や鳥獣の足の意味もあり、こ

間。

オレグとオリガ・ヤーコヴレヴナは当惑しながら彼女の顔を見据える。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 誰の足のことで?

マイヤ・イワーノヴナ モミですよ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ モミさんというのはどなた?

マイヤ・イワーノヴナ モミさん?

オリガ・ヤーコヴレヴナ お知り合いじゃないんですか?

マイヤ・イワーノヴナ 誰とですか?

オリガ・ヤーコヴレヴナ そのモミさんと!

マイヤ・イワーノヴナ そういう名前は初めて聞きました!

オリガ・ヤーコヴレヴナ でも、そうはいつでもやっぱり、初めてではないのでは……

マイヤ・イワーノヴナ 初めてですよ! そうじゃなかったら覚えているはずですし……

オリガ・ヤーコヴレヴナ でも、その人をかじったのですよね……

マイヤ・イワーノヴナ かじった? 私が? 私、犬なんかじゃありませんよ……

オリガ・ヤーコヴレヴナ でも、そうおっしゃいましたよね……

マイヤ・イワーノヴナ 何て?

オリガ・ヤーコヴレヴナ 誰かをかじったって!

マイヤ・イワーノヴナ 私が? 何かの勘違いですよ!

オレグ 僕も、モミさんの足を人前で噛んだって、おっしゃったと思いますけど。

マイヤ・イワーノヴナ それは、モミの木の枝のことですよ!

オリガ・ヤーコヴレヴナ (ホッと) ああ……木ですか……それはそうですね!

オレグ これですべてわかりました! でもどうしてそんなものをかじったんです?

マイヤ・イワーノヴナ それは私が妊娠していたときのことで! うちの家系の女性は、妊娠すると押さえがきかなくなっちゃうんですよ! 特に何の理由もなくね! ましてや私の夫はその頃他の女性を好きになってしまって、彼女と飲んだくれるようになってしまいましたから。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私が妊娠したときは、何事もなく過ごせて、本当に理想的でした。ただ、たくさん泣いて、生きているのが嫌になりましたけど。

マイヤ・イワーノヴナ そう、皆それぞれいろいろありますよね……

オリガ・ヤーコヴレヴナ (オレグに) でも、イチジクのこととはやっぱりよくわからないわ!

の台詞以降の対話を成立させるために、あえて「足みたいなき」と訳した。実際、針葉樹林の枝は、獣の足の形を想起させるものであるため、lapa という単語がこのように様々な意味で使われるようである。

白状しなさい！

オレグ 白状？

オリガ・ヤーコヴレヴナ どうしてイチジクが必要なの？ なんでイチジクなの？

マイヤ・イワーノヴナ イチジクは体にいいってよく言いますよ。例えば、くる病に効くって……

オリガ・ヤーコヴレヴナ くる病？(オレグに)あなた、病気なの？ 私に隠しているのね？

オレグ 僕にくる病患者の症状が1つでもあるなら、見つけてみてくれよ！（彼女を抱きしめて）いいから落ちついて！ 僕はママに良いニュースがあるんだ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ エジプトに2度も続けて行かないわよ、夢で見るのもやめてよ！

オレグ ママは今とっても、とっても必要なんだ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私、年を取ったのね。疑り深くなって、びくびくするようになったわ……あなた、ビジネス・センターの注文、取れたの？

オレグ それは明日のことで今日じゃないよ、15時に契約を結ぶことになってるんだ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなたのことに誇りに思うわ。(マイヤ・イワーノヴナに)この子、すごいんですよ、巨大なビジネス・センターに、オレグは便器を設置することになったんですから！

マイヤ・イワーノヴナ なんて重要なお仕事でしょう！

オレグ 現代的なビジネス・センターで、工学関連の送電網と衛生面を担当することになったんです。この注文を取るのに、すごく苦労しました！

マイヤ・イワーノヴナ お仕事もうまく行きますように！ 便器がないと、何とも不便でどうにもなりませんからね……

オリガ・ヤーコヴレヴナ 快適で静かな私たちのアパート、とっても恋しかったわ！

マイヤ・イワーノヴナ、きっとあなたも気に入っていただけるはずですよ！

マイヤ・イワーノヴナ それはもちろんです！

オリガ・ヤーコヴレヴナ (部屋に入って着て、電気をつける)ただいま。私のゴムの木はどこ？ 寂しかったわ……

部屋の真中に置いてある肘掛け椅子に、ゴム製の空気で膨らませた大柄の裸の男が座っている。オリガ・ヤーコヴレヴナは、不気味なほど長い悲鳴を発する。

オレグ (彼女の方に飛んできて)ママ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ (オレグに覆いかぶさって)下がりなさい！ 今ドアを閉めるから！ 早く！ もしかしたら銃を持ってるかもしれない！

マイヤ・イワーノヴナ (傘をつかんで)あなたがたを見捨てたりなんかしませんよ！（オレグの方に突進してくる）

オレグ ママ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ (絶望的に) 火事よ！

オレグ 火事ってどこ?(部屋を動きまわる)

オリガ・ヤーコヴレヴナ (オレグをつかんで、廊下へ引っ張り出す) あいつは銃を持っているのよ！

マイヤ・イワーノヴナ (ゴム製の男に) 動かないで！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 火事よ！

マイヤ・イワーノヴナ どこが燃えてます？

オレグ どこが燃えてるの？ ママ、離してよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ オレグ、気をつけなさい！ あれは強盗よ！

オレグ 強盗ってどこ？ ママ！ やつはゴムでできてるんだよ！(ゴム製の男の手をつかんで、再び座らせる)

オリガ・ヤーコヴレヴナ ゴムでできてる？

オレグ どこが燃えてるの？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 何が燃えてるって？

オレグ ママ、叫んだでしょう、火事って！

オリガ・ヤーコヴレヴナ どこも燃えてなんかいないわよ！

オレグ じゃあ、なんで火事って叫んだの？

オリガ・ヤーコヴレヴナ あれが強盗だと思ったから。

オレグ でも、なんで火事なんて叫んだの？

オリガ・ヤーコヴレヴナ お隣に早く来てもらうためよ！

オレグ ママと一緒にだと気が狂いそうだよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私と一緒にだと？ それは私の台詞だわ！ あれは誰なのよ？
なんでいるのよ？ どこから来たのよ？

オレグ ああ、ごめん、言っておくのを忘れてた。あれはね、娯楽用なんだ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 娯楽用？ あの男が？ 裸で？ ゴムの？ 旅行になんていかなければよかった！(座る)

オレグ ママったら、芝居じみたこと言って。ただ、言い忘れてただけだよ、ごめんね。

オリガ・ヤーコヴレヴナ あとはほかに、言い忘れていないことはないの？

オレグ お二人とも、椅子に座って。今お茶を持ってきますから！ お二人とも、飛行機の乗り継ぎのせいできつと気持ちが高ぶってしまったんでしょう。(部屋を出て行く)

オリガ・ヤーコヴレヴナ 乗り継ぎのせいですって？ ああ、そうだったわ、私は今朝はまだ砂漠にいたのだった！ 砂漠にまた行きたいわ！ また何時間もあなたと浜辺を散歩して私たちの子供のことをいろいろ話したりしたい……ここはなんだか変だわ！ いつもと雰囲気が違うようなの。

マイヤ・イワーノヴナ それはたぶん、私がいるからですよ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私を見捨てないでくださいね！ 何か全てが変わってしまったみたいなの……(部屋をぶらぶら歩く)この麻袋は何？ こんなもの、ここにはなかったわ！（中身をのぞいて、叫び声を上げる）

マイヤ・イワーノヴナ（同様に叫び声を上げる）何があったんです？

オレグ（走って入ってくる）ママ？

オリガ・ヤーコヴレヴナ（両手を伸ばした状態で、彼に麻袋を引き寄せて、悲劇的に）これはどういうことよ？

オレグ 何？

オリガ・ヤーコヴレヴナ（父親の亡霊に出会ったときのことを語るハムレットのイントロで）イチジクよ！

オレグ ママ、神経がどうかしちゃったんだよ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私の神経がどうかしてるっていうの？ イチジクが麻袋一杯に入っているのよ！ しかも、私の息子は、さらに 200 グラムのイチジクを買おうと、夜中に店中を探し回ったりして！ 何か謎めいたものを感じるわ！ 運命的なものをね！

オレグ（麻袋を覗いて）ほんと、イチジクだ。変だな！

マイヤ・イワーノヴナ 私もイチジクを買うことがありますよ。そんなにしょっちゅうではないですけど、買って食べることもあります！ それが何か？

オレグ そうだよ、ママ、イチジク買うことが何でダメなの？ ただ、買っただけ……悲しいことなんて何もないじゃない？ これはただのイチジクで、麻薬なんかじゃない……

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなた、麻薬って言ったわね？

オレグ ママ、それはただ……

オリガ・ヤーコヴレヴナ それはただ、麻薬ってどういうこと？ オレグ、私がいけない間に、何があったのよ！ あなた、私の息子とは別人みたい！ 1 週間のうちに誰か別の人に替えられたのね！ オレグ！

プラトーク⁹で身をくるんだエーリャがオレグの部屋から登場。

エーリャ（眠そうに、オリガ・ヤーコヴレヴナの言葉に合わせて）オレグ！ 私、恐ろしい夢を見たよ。なんか気の狂った女がずっと叫んでるの、「イチジク！ 火事よ！」って。それで、私を殺そうとしてた！（彼の胸に飛び込んでいく）

だんまりの場。

オリガ・ヤーコヴレヴナ（ショックを受けて）あの子、今起きたところなの？

⁹ 大きなスカーフ。

マイヤ・イワーノヴナ (ショックを受けて)あれは誰？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 分からないわ。でも私が出かける前に、ここでまどろんでいたわよね。

オレグ (エーリャに)それは夢のお告げだよ。僕がイチジクを買ってきてあげたからさ。やっと見つけたんだ。今は匂じゃないって言われたけどね。

エーリャ (彼からぱっと離れて、ぞっとしながら)イチジクを？ 私に？ イチジクだって？

オレグ いったい、皆、どうしたっていうんだ？ イチジクだよ！ だってイチジク買ってきてって、頼んだじゃないか！

エーリャ イチジクを？ 私が？ 頼んだ？ 私に向かって叫ばないで！ (泣き崩れる)

オレグ (彼女を抱きしめようとする)ほら、落ち着くんだ、お願いだから、落ち着いてくれよ……

エーリャ (急に身を振り切って逃げ、ボクシングの手袋をつかんで、ゴム製の男を殴る) どうしてちゃんとわかってくれないのよ？ どうしてそんなに無関心なの？ なんてそんなに鈍いのよ？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 何が何だかさっぱりわからないわ！

マイヤ・イワーノヴナ 私はあなたよりも、もっとわからないわ！

エーリャ 私がお願いしたのは、干し杏だって！ 干し杏！

オレグ そうか、ごめん、悪かったよ……今すぐに店に行って来るからさ！

マイヤ・イワーノヴナ (大声で)お店に行かなくてもいいわよ！

全員、彼女の方を見る。

マイヤ・イワーノヴナ 私、杏を持っていますから。レストランのバイキングで出たときに取っておいたんですよ！(買い物袋の中を探す)

オレグ ママ、紹介するよ……

オリガ・ヤーコヴレヴナ たしか、1週間前にもう紹介してくれたわね？

エーリャ (オレグに)まだ言ってくれてないの？

オレグ (胸に息を吸い込んで)ママ！ 僕とエルフはね……

オリガ・ヤーコヴレヴナ (ささやき声で)やめて……

オレグ そうなんだ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ (悲劇的に)いつのこと？

オレグ ママが出発した翌日。

大きな間。

オリガ・ヤーコヴレヴナ つまり、そのためにピラミッド旅行に私を行かせたのね？

オレグ ママ、僕はママに思いがけないプレゼントをしてあげたかったんだよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ それで、あの子が(エーリヤをあごでさし示す)プレゼントってわけね？

オレグ ママ！ お祝いの言葉、言ってくれてもいいのに！

マイヤ・イワーノヴナ ほら、杏ならここにいます！ エジプトからやってきた杏です！
(エーリヤに手渡す)

エーリヤ (茫然と、マイヤ・イワーノヴナの方を見る) どこから出てきたの？ どうやって？ どうして？

オリガ・ヤーコヴレヴナ (無表情で)おめでとう！

オレグ ママ、あの晩もずっと結婚してくれ、結婚してくれって言ってたじゃないか……

オリガ・ヤーコヴレヴナ (かっとなって)私が 1 年前からずっと言ったのは、私の部屋のコンセントを直してってことよ……コンセント直してって……(涙声で)ごめんなさいね……

オレグ それはエルフが直してくれたよ。

マイヤ・イワーノヴナ オーレチカ・ヤーコヴレヴナ、どうかそんなに気を落とさないで……息子さんは結婚してしまいましたけど、私たちは皆生きてるわけですから……

大きな間。

オリガ・ヤーコヴレヴナ これからどうしたらいいのかしら？

マイヤ・イワーノヴナ ここロシアではどうしたらいいかって？ どうしたらいいかわからないときは、飲むしかありませんよ！ ウォッカを飲むしか！ そうですよ、オレグ？

オレグ ウォッカですか？ 疲れきって、熟睡できなかったし……それに、大事な仕事の前日ですしね？ 飲まないわけにはいきませんね。今買ってきます！

マイヤ・イワーノヴナ その必要はありません！(買い物袋からウォッカのビンを取り出す)Duty Free で買っておいたんです……「チャイコフスキイ」です！ 上品に飲みまくりましょうよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 飲む？ 朝の5時に？

オレグ 何時に飲むとか、どれだけ何を飲むかなんて、そんなのはたいしたことじゃないよ。大事なのは、飲まなきゃいけないって皆が納得することさ！ それも今すぐにね！ 僕は今日これから大事な仕事の打ち合わせがあるからさ！ それに間に合うように行かないと！

オリガ・ヤーコヴレヴナ うちに何か食べ物でもあるの？

オレグ 食べ物はあったかわからないけど、おつまみ程度のものは探せるよ！

エーリヤ あなたがお母さんを迎えに行っている間に、私、ケーキを焼いてみました。あ

とピラフもまだ残ってます。

オリガ・ヤーコヴレヴナ (小声でマイヤ・イワーノヴナに) あの子、いつも眠っているわけじゃないのね。それだけでも少しはショックが和らいだわ。

オレグ 朝5時にピラフだって？ それは勘弁だな！

オリガ・ヤーコヴレヴナ (悲しそうに) 朝5時に、ピラフなんかより、ひどい出来事が起こることもあるわよ。

オレグ エルフ、それじゃ、ピラフを温めて！

エーリャ それはできない！ あの匂いで太ってしまいそうなんだもん。

オレグとエーリャは部屋を出て行く。

マイヤ・イワーノヴナ おめでとうと言ってもいいわよね……

オリガ・ヤーコヴレヴナ なぜ？

マイヤ・イワーノヴナ そんなにあの子のことがお気に召さないの？ もしかしたら、それは第一印象だけかも？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 第一印象だって、やっとのことで我慢できたのよ！ 次の第二印象に耐えるだけの力、どこにあるっていうの？ それに、まだまだこれから先、どれだけいろいろあることか！ いいえ、そんなばかな話あるわけないわよね？ どうして？

マイヤ・イワーノヴナ でも、私たちの話、二人とも聴いてくれるかしら？

オリガ・ヤーコヴレヴナ すべての人生をあの子に捧げたのに！

マイヤ・イワーノヴナ ああ、オーレンカ・ヤーコヴレヴナ、よく分かりますよ！ ああ、子供を女手1人で育てるのは、そんな甘いことではないですものね！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 何もかもあきらめてきたのに！

マイヤ・イワーノヴナ そういうものですよね……もしかしたら、あきらめることはなかったのかもしれませんが、でもそういうものなんです……

オリガ・ヤーコヴレヴナ 名声だって犠牲にしてきたのに！

マイヤ・イワーノヴナ ああ、なんて悲しいことでしょう！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私、今でもラウレンシア¹⁰のパ・ド・シャ¹¹を踊っているところ

¹⁰ ロペ・デ・ベガの戯曲『フェンテ・オベフーナ』(1619)のバレエ『ラウレンシア』(アレクサンドル・クレイン作曲)の主人公。スペインのコルドバ地方にある農村フェンテ・オベフーナに住む美しい娘ラウレンシアは、同じ村の若者フロンドーソを愛しており、二人は結婚することになるが、ラウレンシアのことを愛していた領主は、二人の結婚式当日にフロンドーソを捕らえ、ラウレンシアを城に連れ去る。しかし、ラウレンシアは自力で脱出し、村人たちに領主に対する蜂起を呼びかけることで、皆でフロンドーソを助け出す。そして、フロンドーソは領主を倒し、村人たちは領主の圧制から解放されるという革命劇。初演は1939年キーロフ劇場。ポリショイ劇場では1956年に上演され、ラウレンシア役をマイヤ・プリセツカヤが好演した。

¹¹ 片足で飛び、両足がルティレ(片方の膝を曲げて、その足のつま先が軸足の膝の後ろのく

を夢で見ることがあるの……わかりますか、今でも見るんですよ？！

マイヤ・イワーノヴナ ああ、全く、子供ってものは……

オリガ・ヤーコヴレヴナ 今でも朝は、バレエの稽古から始まるのよ！

マイヤ・イワーノヴナ オーレンカ・ヤーコヴレヴナ、よくわかりますよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ (練習台のそばで立って)ほら！ プリエ¹²！ デミ・プリエ¹³！
(踊る) バットマン・タンジュ¹⁴！ グラン・バットマン¹⁵!! 足を1メートル以上上げて！
ほら、見てください！

マイヤ・イワーノヴナ オーレンカ・ヤーコヴレヴナ！ すばらしい才能をお持ちね！

オリガ・ヤーコヴレヴナ ボリショイ劇場付属の学校で習ったの……でもオレグが生まれてからは、あの子を養うために玄關掃除しかできなかった……でも、いつも床を磨きながら、無我夢中で……手すりにつかまって……グラン・バットマン！ ぜんぶ息子のためだったのに……私は皆に羨ましがられた。お母さん思いの息子さんねって……(涙声になって)お母さん思いの息子……それなのに、知らない間に結婚してしまって……どうしてなの？

マイヤ・イワーノヴナ あなたに心配をかけすぎたくなかったんでしょう！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私には未来があったの、それも輝かしい未来！ 卒業公演でラウレンシアを踊ったの…情熱的で力強いパ・ド・シャだった……パートナーは素晴らしいダンサーだったわ、デスタ・トデスっていうバレエダンサー……あなた、ご存知？ 彼は今、世界で活躍する大スターなのよ！

マイヤ・イワーノヴナ 外国人？

オリガ・ヤーコヴレヴナ エチオピア人ですよ！

マイヤ・イワーノヴナ エチオピア人っていうのは、才能豊かな民族ですよ。私たちのプーシキンだってエチオピア人の血を引いているんですもの！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 漆黒の闇のように真っ黒な美男子で、背がすごく高くて、男の人っていうより、何か神様みたいでね！ 私と彼と一緒に踊ると……劇場全体が狂わんばかりの拍手喝采の嵐だった！ ブラボー、ラウレンシア！ フロンドーソ、ブラボー！って。夫が嫉妬するほどだったのよ！

マイヤ・イワーノヴナ それは誰の夫？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私の夫ですよ！ 私は、熱狂的なファンに劇場から担ぎ上げられるくらいだったの！

マイヤ・イワーノヴナ それでどこまで担がれて行ったんです？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私の家までよ！ 私、すぐ傍に住んでいたんです。共同アパー

ぼみに来るまで腿を引き上げる動き)になり、他の足で下りる動き。シャとは「猫」の意味。

12 膝を曲げる動き。

13 かかとを床から離さず、アキレス腱を伸ばして膝を曲げる動き。

14 足の甲を伸ばして、蹴り上げる。

15 足を大きく蹴り上げる。

ト¹⁶にね。それにしても、私にはさっぱりわからないわ……私があんな花嫁を気に入ると、オレグは本当に思ったのかしら？

マイヤ・イワーノヴナ　きっと、オレグはあの子のこと、愛しているんでしょうね？

オリガ・ヤーコヴレヴナ　あの子のことを？　愛してる？　あの子のどこを愛せるのかしら？

マイヤ・イワーノヴナ　男性っていうのは、ほんとに変わった生き物だから……文字どおり、何の理由もなく、女性を愛してしまうこともあるくらいですからね！

オリガ・ヤーコヴレヴナは、練習台の傍でバレエの稽古をしている。彼女は稽古をすることで精神的に落ち着くことができる。

マイヤ・イワーノヴナ　私、若い頃は本当にきれいだったんですよ……ご想像できないかもしれませんが、私の夫はそんな私のことを愛してくれなかったんです！　夫は酒に溺れ出して、その後何もかも、妊娠した私まで見捨てて出て行きました……私とはいうと、40歳を過ぎてからは、美容のことなどもうどうでもよくなったら、太り始めてしまって、老いに逆らえなくなっていきました……そんなときに、夫と再会したんです。その時の夫は、狂ったかのように私を愛してくれて……酒も絶ってくれて、その後24年もの間、私のことがかわいくてしかたないって言うてくれるんですよ……

オレグとエーリャが入ってくる。オレグは大釜に入ったピラフ、エーリャはおつまみを載せたお盆を持っている。

オレグ　ブラボー、ママ！

エーリャ　(驚いて)何なの、いったい？！

オレグ　ママはバレリーナなんだよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ　元バレリーナね！

オレグ　今もバレリーナだよ。元バレリーナっていうのは、昔は鳥だった、って言うのと同じことだよ！　昔は鳥だったっていう鳥はいないでしょう！

エーリャ　(お盆をマイヤ・イワーノヴナにすごい勢いで突きつけたので、マイヤ・イワーノヴナはぎりぎり何とか受け止める)私もやりたい！　教えてくださいよ！(練習台の傍に立つ)どんな風にやるんです？　見せてくださいよ、今すぐに！　私やってみたいんです！(真似をしようとするが、彼女は、あまりに太りすぎていて、足を高く美しく上げようとしても非常にぎこちない)

オレグ　ブラボー、エルフ！　君、才能あるね！

¹⁶ ソ連時代の共同住宅は、1つのアパートを数家族で使い、台所や浴室は共同スペースだった。

エーリャ できるように頑張ってみる！（オリガ・ヤーコヴレヴナに）教えてくださいよね？

オリガ・ヤーコヴレヴナ（無愛想に）私なしでやってちょうだい！ あなたには才能ないわ！ 元バレリーナと将来のバレリーナ、1つの家族にバレリーナが多すぎるようね！

オレグ ママ！

マイヤ・イワーノヴナ（急かして）ウォッカは皆さんのところに注ぎましたよ！ グラスは待っていてくれませんか！ まずはお互いを理解しあうために乾杯しましょうよ！ 他のものは後で買えばいいですね！

オリガ・ヤーコヴレヴナ オレグには注ぎすぎだと思わ！

オレグ ママ、僕は、沢山注がれたら、ちゃんと飲み干す人間だよ。

エーリャ（オレグに）お酒に夢中になっちゃダメだよ！ アル中ってというのは、いつも楽しく飲むことから始まるんだから。私、よく知ってるもん！

オレグ アル中になるからといって、全く飲んじゃいけないってことはないよね！ さあさあ、飲みましょう！（一気に飲み干す）

オリガ・ヤーコヴレヴナ オレグ！

マイヤ・イワーノヴナ オーレンカ・ヤーコヴレヴナ、そんなに心配なさないで！ 私の夫はお酒を飲むというより、グラスごとまる飲みするほどの勢いでした。それでどうなったかわかります？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 想像できるわ！

エーリャ 私もわかる！

マイヤ・イワーノヴナ あまりに飲みすぎたものだから、禁酒協会の会長になったんですよ！ でもそれは亡くなってからのことですけど。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 誰が亡くなった後のことですか？

マイヤ・イワーノヴナ 夫です！

オレグ 何になったって？

マイヤ・イワーノヴナ 禁酒協会の会長ですよ！

オレグ それはどこにあるんです？

マイヤ・イワーノヴナ どこって何が？

オレグ その禁酒協会ってやつですよ、どこにあるんです？

マイヤ・イワーノヴナ 故郷のチェリャービンスクにあります。ほかにどこにあるっていうんです？

オレグ それじゃ、会長っていうのは、象徴みたいなものだったんですね？

マイヤ・イワーノヴナ もちろん、そうですよ。報酬はありませんでしたから。会議や集会は行われていましたし、新聞も発行されていましたが、すべて無料だったんです。いいじゃないですか、象徴でも！ 夫は稼ぎはありませんでしたが、飲んだくれたわけじゃないんですし。

オレグ それで誰が亡くなったんですって？

マイヤ・イワーノヴナ 私の夫です。

オレグ それで、会長は誰でしたっけ？

マイヤ・イワーノヴナ 夫ですよ！

オレグ 誰の？

マイヤ・イワーノヴナ 私の。

オレグ ということは、1人目のご主人は亡くなって、2人目のご主人が会長さんだったってこと？

マイヤ・イワーノヴナ 私の生涯で夫はただ1人だけです。始めに死にかけてから、会長になったんですよ。1度目に死にかけてときは、神様から死ぬなというお告げがあったんです。そもそも夫は2度死にかけてことができました。2度死にかけて、ようやく思い直したようです。1度目に死にかけてのは飛行機が墜落したときでした。私は彼を看病して治してあげました、私、看護師でしたから……それなのに、夫はというと、妊娠中の私を見捨てて出て行ってしまいました。他の女性が好きになってしまったからと言って。そして、その女性と一緒に酒に溺れるようになってしまったんです！ただ、娘が19歳になったとき、あの人は娘の誕生日にひどく酔っ払った状態で現れました。娘が父親と出会ったのはこのときが初めてで、短いものでした。娘は父親を追い出しました。あれは12月のことだった。夫は道端で凍えきっていたところを助け出されたんですが、私のところにはご主人は亡くなりました、という知らせがきたんです……私は死んだという夫のもとに砲眼に向かっていくかのように、無我夢中で走っていきました。夫のことは、救い出してあげることができましたが、夫は片足を失ってしまいました。……足も娘も失ってしまっ……

エーリャ キリストは1度復活したけど、あなたのご主人は2度生き返ったってことですか？

マイヤ・イワーノヴナ 夫は意識を取り戻して、眼を開け、私を見つめてくれました。彼を取り戻そうと必死になったせいで、髪の毛はぐちゃぐちゃ、泣きはらした眼をした私のことをね。そして彼は、やっとのことでこう言ってくれたんです。「大ばか者の俺を許してくれ……お前が好きだ……」って。私は泣き崩れて彼にこう話しました。「私たち、片足を失ってしまったのよ……」でも、彼は弱々しい声でこんな風に答えてくれました、「大丈夫さ！もっとたくさんのことを見つけたから……」って。そして嬉しそうに微笑んでくれたんですよ！わかりますか？

オリガ・ヤーコヴレヴナ ところで、娘さんはどうなったんですか？

マイヤ・イワーノヴナ 娘は……娘は出て行ってしまいました…人づてに、いろいろ彼女の消息がわかることもあるんですが……ただ、私たちは彼女を待ち続けてはいます……

オリガ・ヤーコヴレヴナ マイヤ・イワーノヴナの旦那さまはとても素晴らしい人なの。誕生日の記念にエジプト旅行をプレゼントしてくださったんですって！

オレグ 誕生日に乾杯しましょう！最初は旦那様に乾杯しましょうか？

マイヤ・イワーノヴナ よろしければ、私の娘のために乾杯しませんか！

オレグ 今彼女はどこにいるんですか？

マイヤ・イワーノヴナ ここ、モスクワです。

オレグ モスクワ？ それならなぜ娘さんは、まだ僕達と一緒にじゃないんでしょう？ 電話してあげましょうよ！

エーリャ 電話しないほうがいいよ！ 飲み過ぎなんだから、早く寝たら！

オレグ これから二度と朝っぱらから嫉妬するようなことはしないでくれよ！

マイヤ・イワーノヴナ さあさあ、そろそろ温かいものでもいただきますでしょうか！ ほら、オレグ、ピラフを入れてあげましょう！

オレグ いいえ！ 僕たち、決めたんです、平日はピラフを食べて、休日は何か美味しいものを食べるって！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 一週間ずっとお米だけを食べてたの？

オレグ 中国人のことをずっと理解したかったから！

マイヤ・イワーノヴナ 中国人のこと、私は尊敬しているわよ。人口の多さとか、とにかくいろいろ尊敬できるわ。オーレンカ・ヤーコヴレヴナ、あなたもピラフ入れましょうか？

オリガ・ヤーコヴレヴナは疑わしそうな表情をするが、マイヤ・イワーノヴナは答えを待たずに彼女の皿にピラフを盛る。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 何か独特な匂いがする……

オレグ 1週間置いてあったからだよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 何かの料理に似ているわね……

マイヤ・イワーノヴナ (試す)新鮮ね……

オレグ 冷凍庫に入れておいたから！ 試してごらんよ！ ひょっとして気に入るかもしれないよ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ (少しだけ試す)何が入ってるの？

エーリャ レーズンです！

オリガ・ヤーコヴレヴナ それって法事粥じゃないの¹⁷！ 私たち、お通夜に参列してるみたい。

オレグ ママ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ とても美味しいわ！ 感激よ！

オレグ ママの顔がゆがんでいるのは、感激したから？ そういうくせがあるとは知らなかったよ！

マイヤ・イワーノヴナ オーレンカ・ヤーコヴレヴナ、だいたいこのピラフはメインディッシュじゃないですから！ おつまみ程度でいいんですよ！ ほら、ウォッカを少し飲んで

¹⁷ 蜜や干しぶどうを入れた通夜・葬式用米(麦)粥。

……

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私、ウォッカは飲みません。

マイヤ・イワーノヴナ (心の底から驚いて)それはどうして？

オリガ・ヤーコヴレヴナ そういう風にしつけられたから！

マイヤ・イワーノヴナ まあ、それは間違っただけだわ！ ウォッカを飲んじゃいけないだなんて。愛国主義的じゃないのね！ ワインを飲むってことは、他の国の経済を支えることでしょ。私たちの国の経済は最悪なのに！ そういえば、『終わりなき物語』¹⁸っていう映画覚えています？ エリーナ・ブイストリツカヤが医者演じていた……この女医さんがお客に呼ばれて、合流できるどころといえば、教授たちやインテリの集団だけだった……でも、そこで彼女のグラスに注がれたものは何でしたっけ？ すぐにウォッカですよ！ 彼女はとっても美人で教養もあって、繊細な女性でした……でも……一気に飲み干しておつまみをパクッ！ それでも、彼女は十分魅力的な女性のままでしたよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 魅力的な女性のままだったって？ (自分でウォッカを注ぎ、一気に飲み干す)

皆が彼女の方を見る。

オレグ ブラボー、ママ！ もう一回やってよ！

マイヤ・イワーノヴナ オーレンカ・ヤーコヴレヴナ、えらいわ！ そしたらおつまみを！

オリガ・ヤーコヴレヴナ (突然酔っ払う)ピラフっていうのは、ラム肉か牛肉で作るものよ、鶏肉でもぎりぎり大丈夫だけど……でも、レーズン入りだなんて、ピラフじゃなくて、法事粥よ。料理の名前は正しくつけることね！

エーリャ 私、お肉を食べませんから！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 全く食べないの？

オレグ そうなんだ、実は僕もね、今日からもう食べないことにするよ。完全に。きっぱり！ だからもう作らないでね！

オリガ・ヤーコヴレヴナ おまえもお肉を食べないの？ (エーリャに)あなた、オレグを、どこか新興宗教に入信させたのね？

エーリャ 動物達がかawaiiそうだから。

オリガ・ヤーコヴレヴナ なるほどね！

エーリャ 小牛ちゃんとか、羊ちゃんとか、にわとりさんも……にわとりさんなんか、皆よちよち歩いて、翼をバタバタさせるのに、飛ぶことができないんですよ……(喉をつかんで飛び上がり、走り去る)

¹⁸ 1955年ソ連製作のメロドラマ。両足が麻痺し、寝たきりとなってしまった才能ある造船技師エルショフのもとに、地方の女性医師で未亡人のエリザベータが治療のため訪れる。次第に二人の間に愛が芽生え、エルショフは奇跡的に歩けるようになる。

オリガ・ヤーコヴレヴナ あの子、食べ方もひどいけど、それ以上に料理は最悪ね。
オレグ ブラボー、ママ！ 僕、生涯で初めてママのことが正しくないと思えたよ。そう
思えたことに乾杯しなきゃ！
オリガ・ヤーコヴレヴナ あなた、もう飲みすぎよ、すっかり別人のようだよ！
オレグ この別人になった人間も、もっと飲みたいと思っているよ。
オリガ・ヤーコヴレヴナ ほどほどにきなさい、オレグ！
オレグ そうだね。絶対にほどほどにしないとね、そうじゃないともっと控えめに飲んで
しまいそうだから！（飲み干して、無意識におつまみを食べる）この鶏肉、僕の誕生日から
あるやつだね！ ずいぶん長居してくれたね！

エーリャが戻ってくる。オレグは立ち上がり、彼女を迎えて、抱きしめ、キスをする。

オレグ エルフ、気分はよくなった？
エーリャ （突然彼を突き放して）裏切り者！ 浮気したのね！
オレグ エルフ、どうしたんだい？
マイヤ・イワーノヴナ （飛び上がって）あなた、どうしたの？
オリガ・ヤーコヴレヴナ （マイヤ・イワーノヴナに）私、だいぶ鍛えられてきたわ！ も
う一杯いきましよう！
オレグ エルフ！
エーリャ 嘘つかないで！
オレグ 僕が？！
エーリャ 私、わかってるんだから！（彼の匂いを嗅ぐ）
マイヤ・イワーノヴナ それは誤解よ！ オリガ・ヤーコヴレヴナがラベンダーのアロマ
オイルにはまっているでしょう、だから、オレグがママのことを抱きしめたときにね、ほ
ら……
エーリャ 鶏肉は、ラベンダーのオイルの匂いなんてしない！
オレグ 全くその通りだよ！
エーリャ 私が気分悪いときに、あなたは……鶏肉を？
オリガ・ヤーコヴレヴナ オレグ、よくもそんなことができたわね？
オレグ ごめんよ、偶然だったんだ……一瞬の気の迷いで……鶏肉なんか全く興味なかつ
たのに……たった一度だけ……それに食べても何とも思わなかったよ……
エーリャ 私が気分悪かったときに、あなたは何とも思わなかっただなんて！
オレグ ごめんね！ これが最後だから！ 今後は鶏肉に絶対に近寄らないから！ カモ
とか七面鳥、豚や牛にも！ 誓うよ！
オリガ・ヤーコヴレヴナ 私たちのお金は、これ以上、帝国主義の国でワインを作ってる
大資本家のもとになんか行かせないわよ！（ウォッカを飲み干す）ウォッカって、なんて誇

り高い響きかしら！¹⁹

マイヤ・イワーノヴナ 紅茶も、誇り高い響きですよ！ ちょうど、エーレチカがケーキを焼いてくれたことですね！

エーリャ あなた、自分の方からお肉を食べないことにしたって言ってたじゃない？ あれは嘘だったの？ なぜそんな嘘を？

マイヤ・イワーノヴナ 男っていうのはね、その場を取り繕うために嘘を言うこともあるの！ ケーキはどこ？

オレグ (エーリャ)許してくれた？

エーリャ ケーキ、持ってくる！(出て行く)

オレグ ケーキ、すごく美味しいですからね！ 予め皆さんにお断りしておきますけど！

マイヤ・イワーノヴナ 何のケーキなの？

オレグ 僕はまだ見たことがないんです！

エーリャがケーキを持って戻ってくる。

オレグ (へつらうように)エールフィック！ 今日とはどんなケーキかな？

エーリャ ニンジンケーキです！

オレグ ニンジンケーキ？ すごい！

マイヤ・イワーノヴナ ニンジンは体にいいですからね！ カロチンがたくさんありますし。

オリガ・ヤーコヴレヴナ そのケーキは、ちゃんとした料理なの、それともおつまみ？

オレグ ママ！

エーリャ 私、すごくがんばって作ってみたんだけど……うまくいくか心配だった。

オレグ 僕は一番大きいやつ！

オリガ・ヤーコヴレヴナがケーキをオレグの皿にのせる。

オレグ ママ、僕は一番大きく切ってあるケーキを取ってって、言ったんだよ、ケーキをほとんど載せてとは言ってない！ だって、ここにいるのは僕1人だけじゃないでしょう！

マイヤ・イワーノヴナ オレグ、どうぞ、健康のためにも召し上がって。気にしないでいいのよ、私はもうお腹一杯だから。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 結婚したんだから、食べなさい！

マイヤ・イワーノヴナ エーリャ、あなたは今何かしているの？

オレグ 彼女はね、射撃に空手、それから車の運転がすごくうまいんだよ。

¹⁹ ゴーリキイ『どん底』の有名な台詞「人間一なんという高尚な音をたてることだろう」のパロディ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ よくもそんなにいろいろできるわね？ 男性とのお付き合いで忙しかったはずよね？

間。

マイヤ・イワーノヴナ あなた、働いているの？

エーリヤ もう 10 年くらい、ドイツから販売用の中古車を運んでます。

マイヤ・イワーノヴナ 車の運転は 1 人で？ ドイツからモスクワまで？ それはかなり危険だわ！

エーリヤ 今は何にも危険なことはいませんよ。ロストクからフィンランドまではフェリーで行きますし、それにペテルブルクまでの道のりは安心だし。ペテルブルクからモスクワに戻るときも落ち着いて運転できます。ただ、以前はベラルーシを越えなきゃいけないとき、ピストルを車の中に隠し持っていたときがありましたね。国境を越えるときに、すぐに手元に置いてね。ある時、何にもないところで、警官が私を引き止めたことがあったんですよ。よく見ると、警官の帽子の下から細く編んだ三つ編みがぶら下がってました。その頃は何でもありの時代でしたけど、お下げ髪の警官なんて、その頃でもかなり異常なことでしたから、私は急いでエンジンをかけました。国境警備の場所まであと 2 キロくらいはあったんですが、ジープが私の車を路肩の方に寄せてきたんです。その時ピストルが役に立ちました。

オリガ・ヤーコヴレヴナ (無邪気に毒舌を吐く) あなた、まさかピストルで脅されて結婚したんじゃないわよね？

オレグ 男が完全に貶められてしまったなあ。でも僕達はそんな簡単には降伏しないぞ！ (ゴム人形の男に) 女性のために飲もう！ 女性のためには立って飲まないとな！ 何だよ、僕が仄めかしていること、わからないのか？ 立てよ！ (彼をまっすぐに伸ばそうとする) すみません、彼はどうやらリュウマチのようですね！

オリガ・ヤーコヴレヴナ オレグ、あなたがそんなに酔っ払ったの、見たことがないわ。

オレグ 僕もママのこんな姿、見たことないよ！ ママだって、かなり飲み過ぎたんじゃないの！

オリガ・ヤーコヴレヴナ でも、思っていたほどまだ飲んでないわ！ 私にアドバイスしないでほしいわね！ 自分のことだけ考えなさい！

オレグ そうだね、僕には欠点があるからね、でも今はその話じゃないよ！

マイヤ・イワーノヴナ 明日恥ずかしい思いをしたくないのなら別ですけど、この酔っ払いの有様はどうしたことなのかしら？

オリガ・ヤーコヴレヴナ きっと恥ずかしくなるわよ！ それももうすぐにね！ でも恥ずかしい思いをするのは私じゃないわ！

オレグ ママ、そういえば、ゴムの木のこと、すっかり忘れたのかい！ エルフがさ、面倒を見てくれてね、赤ん坊を育てるみたいに、夜も寝ないでつきっきりで子守してくれたんだよ……

オリガ・ヤーコヴレヴナ (飛び上がって) どこにあるのよ？

エーリャ (厳かに) 今、今私が持ってきます、見違えるほどになりましたよ！ (ゴムの木を取りに行く)

オーリャ ストップ！ 僕が取りに行くよ！

エーリャ (オレグに) 座ってて！ 私が厳かに持ってきたいの！

オレグとオリガ・ヤーコヴレヴナは座る。

エーリャは大きな鉢に入ったゴムの木を持ってくる。

オレグ (飛び上がって) 鉢の方を前にして運ばないで！ よくないことが起こるって言われてるんだから²⁰！ (ゴムの木を取り上げようとする)

エーリャ (渡さずに) 触らないで！

オレグ 貸して！

エーリャ いやよ！ 私がかかりきりになって育てたんだから！ オリガ・ヤーコヴレヴナ、きっと感謝しますよ！

ゴムの木を落とす。鉢が割れる。

オリガ・ヤーコヴレヴナ あの子は……あの子はただ私をいじめてるだけじゃない！ (ゴムの木の方に身をかがめて泣く)

オレグ ママ！ 全く、なんであんなことしたんだ？

オリガ・ヤーコヴレヴナ オレグ、こうなったら、もっと恥ずかしい思いをすることになるわね！ こんな風に私に対して振舞ったりして、申し訳ないと思わないの？

エーリャ (オレグに) でもあなたが押してきたのがいけないのよ！ 落とさなかったかもしれないのに！

オレグ (エーリャに) ちょっとでも、自分以外のことも考えてくれたらいいのになあ！

エーリャ 私、酔っ払いには我慢できないんだもん！

オレグ それはいつからのことさ？ アル中に麻薬中毒、それに無名の芸術家さんに、普通の男……僕はどのカテゴリーに入るのかな？

オリガ・ヤーコヴレヴナ バカ！

エーリャ (オリガ・ヤーコヴレヴナと一緒に) バカ！

²⁰ ロシアでは、病人や赤ん坊を運ぶときに、足を前方にした状態で運ぶと不吉なことが起こると考えられている。

マイヤ・イワーノヴナ 二人から酔っ払いだっって言われているんだから、早く寝なさいね！
オーレンカ・ヤーコヴレヴナ、お願いだから落ち着いて！ ちょっと折れてしまっただけ
ですよ……今鍋に植えてあげましょう……ほうきはどこ？ オレグ、ほうきは？

エーリャがほうきとちりとりを持ってくる。

オレグ ママ、ねえ、泣かないでくれよ……泣かないでくれるには、僕はどうしたらいい？
オリガ・ヤーコヴレヴナ (オレグを追っ払って、冷静になろうとする) 何で？ 何でなの
よ？ どうしたらいいかわからない！

オレグ わかったよ！ マイヤ……すみません、あなたの父称、なんでしたっけ？

マイヤ・イワーノヴナ イワーノヴナです。

オレグ ありがとうございます。今度はお名前を忘れてしまいました。

マイヤ・イワーノヴナ マイヤよ。

オレグ (ちょっと考えて) 二つ合わせると？

マイヤ・イワーノヴナ マイヤ・イワーノヴナです。

オレグ 覚えました。あなたにお願いしたいことがあります。僕達のところにいてくれま
せんか！ これからもずっと！

マイヤ・イワーノヴナ います、いますから、今はとにかく寝ることよ！

オレグ いや、本当に、僕達と一緒にいてくださいよ！ あなたがいないと、僕達 3 人
は暮らしていけそうにない！

エーリャ 私は出て行くわ！ あなたのせいで吐き気がしてきた！（ドアを後ろ手でバタ
ンと閉める）

オレグ ほら、あれが女性のロジックってやつですよ！ 全部、鶏肉のせい！ にわとり
さんがかわいそう、よちよち歩きで……翼をバタバタさせて……本当にかわいそう！ で
も、復活させることなんてもうできないじゃないか！ それなら、どうしたらいいんだよ？
捨ててしまう？ でも、それなら、あの鳥の死にはどんな意味があったのか、ってことにな
らないか？ どんな理念で説明できるんだよ？

マイヤ・イワーノヴナがゴムの木の上で手を叩く。

オレグ それにゴムの木は？ あれは単にゴムの木じゃない、実は理念そのものなんだ！
人間っていうのは、昔から変わらず、自らの理念のために死ぬものなんだ！（ゴム人形の男
に向かって）あとは、ご婦人たちをよろしくな！ 今日はおまえ、飲みすぎたんじゃないか
……立ち上がることもできないじゃないか！ 僕は妻のところに行くよ。僕は結婚してる
って言いましたっけ？

マイヤ・イワーノヴナ 言いました、言いましたから！ 早く寝なさい！

オレグ この部屋はなんだか狭いなあ！ 通路はどこだ？ 大丈夫、大丈夫、ほら、ここに荷物が置かれているぞ……この小さな橋を真っ直ぐ行けば、たどり着けるぞ！ 飲み足りないでいららするよりも、ほどほどに飲みすぎるくらいがちょうどいい！（バレエの練習用手すりにつかまり、「パ」の動きをしようとしながら自分の部屋に行く）

2人の女性は黙ったまま、オレグが部屋に入っていくまで見ている。

マイヤ・イワーノヴナ あの子、本当に出て行くつもりかしら？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 出て行く？ まさかあの子が？ 私はいつも楽観的だからかもしれないけど、そこまではいかないわよ！（ゴムの木のかげらを拾い集めて）ああ、なんてことなの、私、オレグと喧嘩なんて一度もしたことがなかったのに……

マイヤ・イワーノヴナ 私たち、母親の仕事とは、耐える、ということなんですよ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私の部屋に寝ていただく準備をしてくるわ。私はここで寝ますから。

マイヤ・イワーノヴナ 私は片付けておきますね。

オリガ・ヤーコヴレヴナは自分の部屋に去る。マイヤ・イワーノヴナは机の上を片付けて、敷居の向こうにあるキッチンの方に、机の上にあったものをすべて持っていく。

オレグの部屋からエーリャが顔を出し、誰も出てきていないか確認している。彼女は毛皮のコートを着て、大きなカバンを持っている。ゴム人形の男に近づく。

エーリャ ママのところをいたらいいのよ！ 私とあなたはここでは余計なんだ。また一緒に出て行こう！（人形を抱きしめ、歯で栓を引っ張ると、人形がしぼみ出す）永遠の旅路—これが私の運命なんだ！ あっちに行ったりこっちに行ったりの人生。旅路のどの終点にも、誰も待っていてくれる人はいないし、喜んでくれる人もいない……またこの旅路が始まるってことなのかな？

マイヤ・イワーノヴナがホウキを持って出てくる。エーリャを見て、立ち止まる。

マイヤ・イワーノヴナ どこに行くの？

エーリャ 邪魔しないで！

マイヤ・イワーノヴナ いい、ここに残らないといけないわ。またしても自分の人生をダメにしてしまうつもり？

エーリャ（しぼんだゴム人形をカバンにしまい込んで）私があのお母さんに何をしたっていうの？ どうしてあの方は私のことを嫌うの？

マイヤ・イワーノヴナ いい、こういうことはよくあるの。あの人はとてもいい女性よ。
エーリャ あんな繊細な人、たぶんチョコレート菓子もフォークとナイフで食べそうな人だね。でも女性としては、キッチンのエプロンよりも魅力ないけど！

マイヤ・イワーノヴナ いいこと、彼女はあなたが愛した男性の母親なのよ。

エーリャ もう飽き飽きだよ！ マザコン野郎。

マイヤ・イワーノヴナ たしかに、マザコンね！ でも彼はあなたと結婚しようと思ったのよ、お母さんが全く正反対の理想を抱いているってことも考えないで。たしかに、彼はマザコンよ！ お母さんのことを神様みたいに崇めているから。でも、彼女はそれに値する人よ、あなたはそれを気安く手に入れたの、なんでかって、彼はマザコンだから、マザコン以外にはなれないのだから。彼に人の愛し方を教えたのはあのお母さんなのよ。

エーリャ あの人は私の敵だよ！ どうやって振舞うべきなのかな？

マイヤ・イワーノヴナ それはね、昔から変わらずに言われていることよ、ただ1つのこと、それは敵を愛しなさいってこと。

エーリャはコートを着て、カバンを引きずりながら、マイヤ・イワーノヴナの方に小さく歩み寄る。マイヤ・イワーノヴナは勢いよく彼女を抱き、ぐっと自分の身に引き寄せせる。

エーリャ ちょっと老けたんじゃない！

マイヤ・イワーノヴナ あなたもね！

エーリャ 私、すぐにわかったよ！

マイヤ・イワーノヴナ 私も。

エーリャ どう、暮らしの方は？

マイヤ・イワーノヴナ 暮らし？ 変わらないわ。何とも変えられないものね！

ベッドのシーツを山のように抱えたオリガ・ヤーコヴレヴナが出てくる。彼女は大きめの快適そうな部屋着に既に着替えている。立ち止まって、マイヤ・イワーノヴナとエーリャを見つめる。

エーリャ (オリガ・ヤーコヴレヴナを見て) エジプトにもっといらしたほうがいいですよ！ 日焼けした肌がよく似合ってますね。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 何ですって？ ありがとう。

エーリャはオレグの部屋に去る。ぎこちない沈黙。

オリガ・ヤーコヴレヴナ ベッドの準備できましたよ。

マイヤ・イワーノヴナ 何ですって？ ありがとうございます。

オリガ・ヤーコヴレヴナ　なんて不安な夜なんでしょう！
マイヤ・イワーノヴナ　朝ですよ。
オリガ・ヤーコヴレヴナ　何ですって？
マイヤ・イワーノヴナ　夜はもう終わって、明るくなってきていますから。そのうちいろいろ落ち着くことでしょう。
オリガ・ヤーコヴレヴナ　(怯えた様子で)何かが違うわ！
マイヤ・イワーノヴナ　すべてうまくいきますよ……
オリガ・ヤーコヴレヴナ　いいえ、またしても何かが違うの！(声を上げて)彼はどこ？
マイヤ・イワーノヴナ　飲んだくれて、寝てますよ。
オリガ・ヤーコヴレヴナ　あの、ゴム人形よ、どこに行っちゃったのかしら？　気が狂いそうだわ！

オレグの部屋からオレグの叫び声とうめき声が響き渡る……オリガ・ヤーコヴレヴナは部屋のドアへと駆け寄る。

オリガ・ヤーコヴレヴナ　何が起こったのかしら？
マイヤ・イワーノヴナ　二人で何とかするでしょう……

オリガ・ヤーコヴレヴナは踏ん切りがつかず、立ち止まる。再びオレグのうめき声と何か落ちる音。

オリガ・ヤーコヴレヴナ　きっとエーリヤが手のひらでレンガを割ってるんだわ！　オレグが飲みすぎちゃったから！(オレグの部屋のドアを開けると、敷居のところで固まる)あれは何なの？(ショックを受ける)

オレグの大きなうめき声と叫び声。

マイヤ・イワーノヴナはそっとドアを閉める。

オリガ・ヤーコヴレヴナ　(ショックでソファァーに座り込み、しばらくして)あの子、窮屈そうだわ！

マイヤ・イワーノヴナ　私たちのこと、気づかれないでよかったわ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ　あれは一体何なの？

マイヤ・イワーノヴナ　愛ですよ。ご自分の若かりし頃を思い出してごらんなさいよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ　あんなんじゃなかったわ！　私の夫なんか、本当にエレガントに私にアプローチしてくれたのよ！　3年間も！

マイヤ・イワーノヴナ 今と昔じゃ時代も違うし、スピードも違うんです。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私と夫はもっと早く結婚できたんですけど、彼のお母さんが反対していたの。私がバレリーナになろうとしていたことが気に入らなかったから。芸術家ってというのは、軽率な人間ばかりだって、お母さんは思っていたみたい。だから、私と夫との関係はいつもきちんとしていて清いものだった。彼のお母さんの前では、手をつなぐことだってしようとはしなかったわ。でも、夫は私がバレリーナだってことを誇りに思ってくれていたの。一度だけ、私のバレエのトリコとかショートスカートとかポアント²¹とかを、彼がずたずたに引き裂いたことがあったけど……あれは嫉妬にかられてだったみたい……愛ね……あの子たちの愛は理解できないけど……

マイヤ・イワーノヴナ そうですね、あの子たちの愛は……何と云うか、エクスプレス級ですね……

オリガ・ヤーコヴレヴナ このエクスプレスは私の人生を追い抜いていってしまったわ！でも、私は負けないわよ。私が負けるか、あの子が負けるか—今すぐにオレグに言ってやるわ！

マイヤ・イワーノヴナ ごめんなさい、オーレンカ・ヤーコヴレヴナ、おそらく、今は少しまずいんじゃないかって……

オリガ・ヤーコヴレヴナ おっしゃるとおりね、私はもうオレグには必要ないんだわ。あの子はもう私を愛していない。もしかしたら、嫌われてしまったかも。それは確かね。

オレグ (シーツで体を包んで、自分の部屋から勢いよく飛び出してくる) ママ！ ママ！ (オリガ・ヤーコヴレヴナの方に駆け寄ってくる) 僕にはママが必要だ！ 助けて！ わからないんだ……どうしたらいいのか、わからないんだ……(マイヤ・イワーノヴナを見て) 助けてください！

朝。もしかしたら、すでに昼かもしれない。窓の向こうでは雪が降っている。マイヤ・イワーノヴナは昨日と同じ服を着て、重そうな足取りで部屋の大きさを測るように歩いている。オリガ・ヤーコヴレヴナは部屋着からきちんとした恰好に着替えているが、同様に部屋を行ったり着たりしている。2人の女性がすれ違うとき、一端立ち止まってお互いを見つめあうが、何を言ったらいいかわからずに、息を吸って、そのまま部屋を歩き続ける。

オリガ・ヤーコヴレヴナ (すれ違いざまに一度) もしかして……

マイヤ・イワーノヴナ やめときましよう、さすがに聞きづらいわ……

オリガ・ヤーコヴレヴナ 最後に電話したのはいつ？

マイヤ・イワーノヴナ 10分ほど前かしら……

オリガ・ヤーコヴレヴナ たった10分？ そんなはずないわ！ もう15分くらいたった

²¹ バレエシューズの硬いつま先。

んじゃないかしら……オレグが電話してくれたらいいのに！

マイヤ・イワーノヴナ おそらく、あの子につきっきりきりなんでしょう。

オリガ・ヤーコヴレヴナ お産につきっきりってこと？

マイヤ・イワーノヴナ たぶん……

オリガ・ヤーコヴレヴナ オレグ、耐えられるのかしら？

そして、再び歩き回っている。

オリガ・ヤーコヴレヴナ (最初に耐えられなくなって)もう電話で聞いてみてもいいでしょう！

マイヤ・イワーノヴナ (電話で)案内所ですか？ またお聞きしますけど。(オリガ・ヤーコヴレヴナに)まだ何も連絡がないって。(受話器に向かって)すみませんが、そちらで直接見て確認することはできないんですか？ ああ、怒らないでくださいよ、ただお願いしてみただけなんですから！ あなただって私たちのことがおわかりでしょう！ あの子は 43 歳なんですよ、初産だし。しかも早産なんです。ごめんなさい、ごめんなさいね。(受話器を置く)

オリガ・ヤーコヴレヴナ 出かけましょう！ 心配だわ。私、悪い予感がするのよ。

マイヤ・イワーノヴナ それは怖いからよ。オーレンカ・ヤーコヴレヴナ、神経が苛立ってるのね。

オリガ・ヤーコヴレヴナ マイヤ・イワーノヴナ、きっと神様が私にあなたを遣わせたんだわ、そうじゃなかったら……それなら……ひょっとして、お祈りをするべきかしら？

マイヤ・イワーノヴナ それは無駄なことじゃないわね！

オリガ・ヤーコヴレヴナ でも……私、無神論者だったってこと、忘れてたわ……

マイヤ・イワーノヴナ そんなこと、神様は気にするはずないわ！

オリガ・ヤーコヴレヴナは自分の部屋に行き、額に入った大きな写真を持って戻ってくる。

マイヤ・イワーノヴナにそれを手渡す。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 持っててください！

マイヤ・イワーノヴナ (写真を見て)すぐにわかったわ……あなたは……全く変わっていませんね……この方が、あなたのご主人ですね……

オリガ・ヤーコヴレヴナ そうよ、オレグの父親……私……実は、一度もお祈りなんてしたことなかったんですよ……アイコンもうちにはないから……それに、神様に直接お祈りを捧げるのって、なんだか決まり悪くて……私、えらい人ってどんな人でも怖くて……それじゃ、あなたは、神様っていると思っているのね……

マイヤ・イワーノヴナ いますよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ それはどうやってわかったの？

マイヤ・イワーノヴナ ただ分かっているだけ。いつも分かってたことですけど。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私は神様に直接お祈りを捧げるのが怖くて……だから夫を通じてならできるの……それでもいいかしら？

マイヤ・イワーノヴナ そんなことはたいしたことじゃないわ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ (写真を見ながら)オレグ！(マイヤ・イワーノヴナに)夫もオレグっていう名前なの。夫の名前にちなんで息子にも同じ名前をつけたんです。オレグ！あなた……たぶん、何のことだかわかっているわよね？ そっちでお願いしてほしいのよ……赤ちゃんが無事元気に生まれてきてくれますようにって……もしも、そっちでは男の子でも女の子でも、どっちでもかまわないというのなら、私は女の子が欲しいの……今もあなたに会えなくてさびしく思っているわ……あなたがないから……息子は成長したわよ……たぶん、わかっていると思うけど……オレグもすべてうまく行くように、そっちでお願いしてちょうだいね……あなたはおじいちゃんになるのね……こんなところかしら……

電話が鳴る。マイヤ・イワーノヴナが身震いをして、写真を落とす。ガラスが割れる。

オリガ・ヤーコヴレヴナ (叫び声を上げる)不吉な予感がするわ！

二人は電話を見つめ、近づくの怖がっている。しかし、両者同時に電話に駆け寄る。

オリガ・ヤーコヴレヴナ (最初に受話器をとって)もしもし！ はい……はい……はい……(受話器を置き、沈黙する)ああ、どうして、どうして世界は何も変わらないのかしら？

マイヤ・イワーノヴナ 何だって？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 孫よ！

マイヤ・イワーノヴナ 男の子？

オリガ・ヤーコヴレヴナ そう。

間。

マイヤ・イワーノヴナ あなたは女の子が欲しかったのよね？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私が？！ そんなわけじゃない！ 2900グラム、50センチの赤ちゃん！ なんて幸せなのかしら！

マイヤ・イワーノヴナ 2000！ 900グラム！ 50センチですって！ 大きな赤ちゃんだこと！

オリガ・ヤーコヴレヴナ (訝しげに)大きな赤ちゃんかしら？

マイヤ・イワーノヴナ 早産だったから……

オリガ・ヤーコヴレヴナ ああ、神様、私、この子のことが好きでたまりません！

マイヤ・イワーノヴナ (いきなり彼女を抱きしめて)おめでとう！　なんて幸せなの！
なんて幸せなのかしら！　あなた、泣いているの？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 幸せだから！

マイヤ・イワーノヴナ そういえば、あの子の具合はどうなのかしら？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 聞き忘れたわ！ 私ったらついあわててしまって！ あの子こそ英雄だわ！ 43歳で赤ちゃんを産むなんて！ オレグはエーリヤのこと、塵一つつかないように大事にしてあげないといけないわ！ 今から彼女のところに行きましょうよ？！

マイヤ・イワーノヴナ 今すぐに行きましょう！

オリガ・ヤーコヴレヴナ (写真とガラスの破片を持ち上げて)新しく額に入れなおしてあげるから。大丈夫よ。(写真を見て)ごめんなさいね！　ありがとうね！

マイヤ・イワーノヴナ 果物を買って行きましょう！

オリガ・ヤーコヴレヴナ それにお花も！ あの子はどんな花が好きなのか、知ってたらよかったわ。

マイヤ・イワーノヴナ アイリスが好きよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ アイリス？

マイヤ・イワーノヴナ あの子は、子供のころからアイリスが好きなの！

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなたが列車に乗り遅れてくれたのって、本当に奇跡だし、すごいことだわ、すべてがこんなにうまく行って！

二人は毛皮のコートと上着をそれぞれ着る。

オリガ・ヤーコヴレヴナは突然固まる。

マイヤ・イワーノヴナ オーレンカ・ヤーコヴレヴナ、どうかしました？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 今ちょうど、へその緒が切られているんじゃないかって、そういう予感がしたの……まるで、私の息子がちょうど今、私から切り離されているような感覚がして！

マイヤ・イワーノヴナ それは、いつかは起こることよ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ でも私は痛くもないし、悲しくもないの。

マイヤ・イワーノヴナ それが人生ってものよ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私、本当に幸せよ。まるで若返ったみたいで、これからの将来があるかのよう……これは奇跡みたいなことだわ！　まだ赤ちゃんに会っていないのに、この会ったこともない赤ちゃんのことほど、人を愛したことが一度もないなんて。ねえ、今日私たち、この子に会えるかしら？

アパートにオレグが入ってくる。彼は打ちひしがれた表情をしている。

オリガ・ヤーコヴレヴナ オレージェク！ エーリヤの様子はどうか？

オレグ (無関心そうに) 彼女なら大丈夫だよ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ あの子が出産するとき、立ち会ったのよね？

オレグ 立ち会ったさ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ それで？ 赤ちゃんが生まれる瞬間を直接見たのよね？

オレグ 見なかった。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 出て行っちゃったの？

オレグ 倒れた。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 倒れたってどうして？

オレグ 気を失ったんだよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ (オレグを抱きしめて) おめでとう！ どうか、お願いだから怒らないでね……

オレグ ママ、ごめん、ぼく急いでいるんだ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私たちに知らせに来てくれたのね？ それでまたあの子のところに行くのよね？

オレグ ママ、忘れたの、今日はビジネス・センターと契約を結ぶことになってるんだ。着替えていかないと。(自分の部屋に去る)

オリガ・ヤーコヴレヴナ こんな大事なときなのに、あの子ったらまた便器のこと？

マイヤ・イワーノヴナ 気を失ったときに、頭をぶつけたからじゃないかしら？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 緊張しすぎて、ちょっと気が変になっちゃったのよ……

マイヤ・イワーノヴナ でも、見た感じでは、オレグは普通のような気がするけど……あんな風に普通のオレグ、見たことないわ。かえって心配ね！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私も心配になってきたわ。よくわからない……赤ちゃんは元気で、エーレチカも無事で……私には腹を立ててる！ 仲直りしないといけないわ！ うまくできないのだけど……私たち、今まで喧嘩したことなんてなかったから！

マイヤ・イワーノヴナ ひょっとして、オレグは女の子が欲しかったってだけなんじゃない？ 男の人には、そういうことってよくあるのよ……とはいっても、普通は男の人は男の子が欲しいっていう方が多いかもしれないけど……

オリガ・ヤーコヴレヴナ 男の子がいいとか、女の子がいいなんて、オレグは絶対に気にしていないはずよ。

自分の部屋からスーツ姿のオレグが出てくる。女性 2 人を見ないで、部屋を出て行こうとする。

オリガ・ヤーコヴレヴナ オレージェク！

オレグ 遅刻しそうなんだ！ 1時間半後くらいには戻るよ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 戻ってこないで！ 私、すべてわかっているわ！ 真っ直ぐエーリャのところに行きなさい！

オレグ どうして？ 今そこから帰ってきたところだし。

オリガ・ヤーコヴレヴナ どうしてってどういうことよ？！ 私とマイヤ・イワーノヴナも今から行くから……

オレグ どうして？

オリガ・ヤーコヴレヴナ もしかしたら、ほんの少しだけだけど……見られるかもしれないでしょう……

オレグ 誰を見るの？

オリガ・ヤーコヴレヴナ オレグ！ あなたの息子が生まれたのよ！

オレグ 僕の？

オリガ・ヤーコヴレヴナ わけが分からないわ！ わざと脅かそうとしているのね！

オレグ 全部一気に言ってしまったほうがいいね！ そうさ、エーリャは男の子を生んださ。でも、その子は僕とは何の関係もないってことがわかったんだ。

間。

オリガ・ヤーコヴレヴナ やっぱり分からないわ……

オレグ 僕がバカだったんだ！ 本当に大バカ者だよ！ ママの言うことをなんで聞かなかったんだろう？ ママはいつも正しかったよ！ ごめんね、僕のこと、許して！ 赤ちゃんは僕の子じゃないんだ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ エーリャがそう言ったの？

オレグ エーリャが？ いや、エーリャは、僕の赤ちゃんだって言い張ってるよ……全く説得力はないけどね！

オリガ・ヤーコヴレヴナ でもどうしてそんな風に疑わしいと思うのよ？

オレグ 疑わしい？ 疑ってなんかいないさ！ 自信があるくらいだよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ どうして？

オレグ 僕に似ていないから！

マイヤ・イワーノヴナ そんな、誰に似てるかなんて、まだわかるもんじゃないわよ！

オレグ でも、僕に似てないってことは、絶対わかるんだ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 誰に似ているかなんて、大したことじゃない、赤ちゃんが元気でいてくれるだけでいいの！

マイヤ・イワーノヴナ オレグ、どんな男性も、赤ちゃんが自分の子かどうか、最後まで確信が持てないものなんですよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 赤ちゃんは私たちの子よ！

オレグ 違う！

マイヤ・イワーノヴナ でもエーリャは嘘をつけないはずよ！

オレグ ママ！ ごめん、許して、僕はママを悲ませてばかりで！ ちゃんと言うことを聞かずにごめん！ ママはこんなこと耐えられるだろうか？ ママは本当にすばらしい人で、他人を裏切らないし、誠実で、正直な人なのに！ それなのに僕ったら……僕はママを苦しめる原因を作っただけ！ どうやって、どうしたら償えるかな？ ママ、教えて！僕はママのために何でもするから！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 彼女のところに行きましょう！

オレグ 嫌だ！ 彼女はもう僕達のうちには来ることはないよ！ ママ、心配しないで！ママは彼女に会うこともないから！

オリガ・ヤーコヴレヴナ いいえ！ オレグ、あなたはエーリャと別れることはできないわ！

オレグ できるさ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私は……私は絶対に反対よ！

オレグ 反対？ ママが？！ どうして？

オリガ・ヤーコヴレヴナ どうしてって……それは……あの子はね、ずっと誰にも必要とされてこなかったの！ 今度は赤ん坊と一緒にとなると、なおさらよ！ あの子は生きることにもともと順応できない子なの、だからこのままだと赤ん坊と一緒に破滅してしまうわ！

マイヤ・イワーノヴナ 破滅させたりはしない！

間。 オレグとオリガ・ヤーコヴレヴナはマイヤ・イワーノヴナの方を見る。

オリガ・ヤーコヴレヴナ でも……でも……あの子は変わらないわ、物分りが悪いから……きっと赤ん坊をドイツからモスクワまで車で連れ回すわ！ それか、あの……ゴム人形の彼氏に預けて、赤ん坊を家に置いていくかもしれない！

マイヤ・イワーノヴナ オーレンカ・ヤーコヴレヴナ、ご心配なく。私があの子の赤ちゃんをチェリャービンスクに連れて行きますから。

オレグ あなたが？

マイヤ・イワーノヴナ ちゃんと私たちが育ててあげますから、ご心配なく！

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなたが私の孫を育てるつもりなの？

オレグ ママ、赤ん坊はママの孫じゃないよ！ それに僕の息子じゃない！

マイヤ・イワーノヴナ 赤ん坊があなた方にとって誰かっていう問題は、ご自分達でお決めになったら。あの子が私の孫だってことは確かですから！

オリガ・ヤーコヴレヴナ あなたの孫？

オレグ 訳がわからない！

マイヤ・イワーノヴナ 私は娘をずっと探していたんです。だからもうあの子を失いたくない！ 19歳のときにあの子は家出して、43歳になってやっと戻ってきたんですから！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 家を出た？ 戻ってきた？ 訳がわからないわ！ でも……でも……私もあの子を失いたくないわ！ 私の孫なんだもの！

オレグ ママ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ いえ、まずはちゃんとはっきりさせないといけないことがたくさんあるわ！

オレグ はっきりさせることなんて何もないよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ でも、赤ちゃんは私の孫なの！

オレグ ママ、赤ん坊は、ママにとって何の関係もないんだよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ でも、私はエーリヤにも会いたいし……それにあの子の……赤ちゃんにも会いたいなの！

オレグ どうして？

オリガ・ヤーコヴレヴナ どうして、あなたが私の代わりに全部決めちゃうのよ？

オレグ わかったよ！ そうしたら自分で確かめて決めたら、エーリヤが正しいか、僕が正しいか！

エピローグ

客間。すでに太陽の光が注がれている。窓は少し開けられていて、鳥の鳴き声が聞こえる。鮮やかな色の小旗のついた花輪が壁にかかっている。机の上には緑色の枝が花瓶に入っている。

ゴム人形の首には、おもちゃのガラガラと鮮やかな色の小玉でできたネックレスがかかっている。人形の傍には乳母車が置いてある。3人の女性は運動着で、バレエの練習台のところで練習をしている。エーリヤは、痩せてしとやかな女性になって、驚くほど美しく見える。

オリガ・ヤーコヴレヴナ エーレチカ！ 背中はもっと真っ直ぐ、首はもっと伸ばして、背中はそのまま、そのままよ！ マーイエチカ・イワーノヴナ、お腹は引っこめて、つま先はもっと向こう……つま先は伸ばしましょう！ 真っ直ぐ立って、肘は落とさないでね！ はい、1、2、3！ 背中はそのまま！ はい、1、2、3！ つま先は伸ばしましょう！ はい、1、2、3！ 次のポーズ！ マーイエチカ・イワーノヴナ！ 左手、右足！

エーリヤ ママ！ ママの右足はどっちよ？

マイヤ・イワーノヴナ だって、右と左、区別つかなくなっちゃったんだもの。私の足、

どっちも同じで、まるで大根足だわ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ マーイエチカ・イワーノヴナ、1ヵ月後には、ご自分の足が見違えるようになるわよ！

マイヤ・イワーノヴナ 細い竿みたいになるかしら？

オリガ・ヤーコヴレヴナ エーレチカ、上手よ！ はい、1、2、3！

マイヤ・イワーノヴナ うちのおじいちゃんは、自分の孫が生まれるだなんて、いまだに信じられないはずよ、ましてやおばあちゃんの私がバレリーナになるなんてことも！

オリガ・ヤーコヴレヴナ エーリヤ、左足から、左足からよ、それからマイヤ・イワーノヴナ、あなたは背中を真っ直ぐ、忘れないで！ はい、1、2、3……赤ちゃんはね、美しくて幸せな女性に囲まれて育たないといけないものなの！

赤ん坊が泣き出す。

オリガ・ヤーコヴレヴナ (すぐに赤ん坊のもとに駆け寄っていく)私の天使ちゃん！ 僕たち、お腹ペコペコよね！

マイヤ・イワーノヴナ (オリガよりほんの少しだけ遅れて)腕白なんだから！ 今まんまにしましょうね！

エーリヤ (その場に残って)おばあちゃんたち！ 離れて！ まだ早いつて！

オリガ・ヤーコヴレヴナ (半歩だけ乳母車から離れて、世話をやく)僕たち、おっきしたら、まんまよね！

マイヤ・イワーノヴナ (同様に、ほんの少しだけ離れて)ママ！ 僕たちにまんまちょうだいよ！

エーリヤ ちょっと泣かせておいたら、また寝るから！ ちゃんと時間通りに、あともう1時間半は寝てもらおうの！

マイヤ・イワーノヴナ ママに言ってやりなさい、ママが寝る時間だよって！

オリガ・ヤーコヴレヴナ それはかわいそうよ！ エーリヤ、いつ寝たらいいか、とか、いつミルクを飲むか、っていうのは赤ちゃんが一番よくわかってるものなのなんだから！

エーリヤ おばあちゃんたちったら！ 一致団結して私に逆らおうってわけね！

オリガ・ヤーコヴレヴナ (少しおもねるように)違うわ、私たちが一致団結してやってるのは、バレエよね！

マイヤ・イワーノヴナ 私もあなたが赤ちゃんだったころ、ミルクをあげる時間をきっちり守ってたわ！(乳母車に一步近づく)でも、いまだに恥ずかしいことをしたと思ってるくらいなんだから！ この子、私に笑ってくれたわ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ (すぐに乳母車の方に戻ってきて)それは私に笑ってくれたのよ！ マイヤ・イワーノヴナ、勝手にご自分のものにしないでくれるかしら！

エーリヤ (近づいてきて)それは、ゴム人形の彼に笑ってるの。たぶん、自分のパパだと

思ってるんだね！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私の天使ちゃん、おばあちゃんに抱っこしてもらいたいのね！

エーリヤ やめて！ まだちゃんと寝てないから！

オリガ・ヤーコヴレヴナ それなら、おばあちゃんの腕の中でねんねしたらいいのよ。私、この子と一緒にちょっとお散歩してくるわ、抱っこしてあげましょうね！ 私のお星様！

マイヤ・イワーノヴナ オーレンカ・ヤーコヴレヴナ、あの子はあなたには重過ぎるわ！

私が抱っこしたほうがいいわね！ 私のかわいいいちごちゃん！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 何をおっしゃるの？ 私はぜんぜん大変じゃないわ！ 私のかわいいお魚ちゃん！

マイヤ・イワーノヴナ あなた、あの子が寝る前に抱っこしてたでしょう！ 今度は私の番です！ 私の小鳥ちゃん！

エーリヤ おばあちゃんたち！ どいて！ 甘やかせすぎはよくないよ！

マイヤ・イワーノヴナ 私たち、たくさん甘やかしてあげましょうね！

オリガ・ヤーコヴレヴナ エーリヤ、あなたって、すごく厳しいお母さんね！ なんて美しい子なんでしょう！ この子が私の孫だからってわけじゃないけど、傍からみてもそう思うわ！ 体格も理想的ね！ バレエのソリストになるわ。私の苗字がやっぱりバレエ界に残ることになるんだわ！

マイヤ・イワーノヴナ 頑丈な青年だこと！ これなら毎日お酒飲んでも、アル中になることはないわね！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 鳥たちだって、こんなに大きな声で歌ってるわ！ なんてにぎやかで嬉しさがあふれる春なんでしょう！ エーレチカ、ミルクをあげて早くお散歩に連れて行きましょう！ 外の空気を吸いながら寝かせたらいいのよ！ 今私、すぐに着替えるから！（すばやく自分の部屋に去る。ドアは閉めない）

マイヤ・イワーノヴナ 今度は私がお散歩に出かける番なのに！ オーレンカ・ヤーコヴレヴナ、ずっと勘違いしてばかり！

オリガ・ヤーコヴレヴナ（自分の部屋から）順番なんて、身内なんだからどっちでもいいのよ！

マイヤ・イワーノヴナ 私、すぐに着替えてくるわ！（オレグの部屋に去るが、ドアは同様に開け放ったまま）

エーリヤ（赤ん坊に液体の入った哺乳瓶を見せて）ケフィア飲もうか？（あげる）まったく、おばあちゃんたちったら！ ママと一緒に散歩させてくれないんだから！

オリガ・ヤーコヴレヴナ（自分の部屋から）エーレチカ、あなたの方こそ少し寝た方がいいわ！ 赤ちゃんのせいで夜中ずっと寝かせてもらえてないでしょう！ 私、全部聞こえているのよ！

エーリヤ 寝かせてくれないって？ 私が？ 私なんか一度も夜中に赤ちゃんのところに起きていたりしてないよ！ だってあの子がちょっと泣いたら、すぐに二人とも飛び込

んでくるんだもん！ 二人とも、ドアのそばで夜中中ずっと、耳を済ませているの？

マイヤ・イワーノヴナ 私たちはお散歩に行ってくるから、あなたはお昼ご飯を作っておいて！

オリガ・ヤーコヴレヴナ お昼ご飯は作らないでいいわ！ 私があとで作ります！ お散歩から帰ってから作ってあげますよ！

マイヤ・イワーノヴナ わかったわ！ 一緒に出かけましょう！ でも乳母車を押すのは私ですよ！

二人とも同時に出てくる。二人とも鮮やかに着飾っている。マイヤ・イワーノヴナはつばのついた帽子をかぶっている。オリガ・ヤーコヴレヴナは短いスカートをはいている。二人とも、乳母車のそばに立って、準備ができている。

エーリヤ (ぶつぶつ言う)ほら、お二人の言うことを聞いてミルクをあげてみたけど、まったく食欲がないじゃない！ 決められた時間通りにずっとミルクをあげてないからだよ！

マイヤ・イワーノヴナ 今お散歩したら食欲出てくるわよ！ 私がこの帽子をかぶると、皆に聞かれるの、このちっちゃな乳母車にいる赤ちゃんは娘さん、それとも息子さん？って。

オリガ・ヤーコヴレヴナ (狡猾そうに)私なんか、このスカートを着ていると、皆に聞かれるのよ、このちっちゃな乳母車にいるのは、弟さん、それとも妹さん？って。まあ、笑ってるわ！ ユーモアがわかるのね、オレグみたいだわ！ あの子の子供じゃないなんて！ なんて馬鹿げたことかしら！ オレグの目はいったいどこについているのかしらね？ わからないわ！

アパートにオレグが入ってくる。

オリガ・ヤーコヴレヴナ 誰が帰ってきたのかしら！ パパよ！ パパにご挨拶なさい！ オレージェク、この子、日に日にどんどんあなたに似てきたわね！（赤ん坊を抱っこし、高く持ち上げる。すると、赤ん坊が黒人の子であることがわかる）

オレグ ママはいつも正しいことを言ってくれるよね！ その通りだ！ エーリヤ、ちょっと話があるんだけどいい？

エーリヤ いいよ！ でもこれが最後にしてね。私に嘘をつかせようとししないで！

オレグ 僕の部屋に行こう。いや、君の部屋か。

エーリヤ あそこはずっとあなたの部屋よ。私たちはお客さんだから！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 誰がお客さんですって？ 私の孫もお客さんてこと？ 私の孫はこの主人よ。

オレグとエーリャはオレグの部屋にいなくなる。

マイヤ・イワーノヴナ でもどうしてこの子は……あの肌の色で生まれてきたのかしら？
何か理由があるはずよね！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 人種差別をするような人はここにはいないといいけど！

マイヤ・イワーノヴナ 私、いろいろ考えすぎて頭がくらくらしてきたわ……

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私は気に入っているわ！ ほかの子は皆白いけど、私たちの子は違うんだもの！

マイヤ・イワーノヴナ 赤ちゃんって、いくら見ても見飽きないくらいかわいいわね！ もし、うちのおじいちゃんがこの子に会ったら、再び飲んでもらえることはないわ！ ただ、どこか変だなんて思うのは……この子のパパは白人で、おばあちゃんも白人で、おじいちゃんも……おじいちゃんは……

オリガ・ヤーコヴレヴナ おじいちゃんはパイロットだったのよ！ あなたがなんでそんなに変だと思われるのか、そっちの方が驚きだわ！ 私は全くおかしいとは思わない、この子は私の血が繋がった子、私の太陽よ！

マイヤ・イワーノヴナ 毛布で包んであげないと！ 風邪を引いてしまうわ！ なんていったって、この子の遺伝子はアフリカの気候に適しているはずだから！

オリガ・ヤーコヴレヴナ (乳母車に赤ん坊を置くと、赤ん坊が泣き出す)泣かないで、私のかわいい黒んぼちゃん！ ほら、見てご覧、おばあちゃんのおんよ、こんなに高く上がるのよ！ ほら、こんなに高く！ 大きくなったら、教えてあげますからね！

マイヤ・イワーノヴナ おじいちゃんはパイロット……飛行機が墜落して亡くなった後、おばあちゃんは……そうよ、つまり、パ・ド・ドゥ²²があったわけね！ オーレンカ・ヤーコヴレヴナ、パ・ド・ドゥがあったの？ ごめんなさいね、あなたの過去を詮索してしまって、でもどうしてもはっきりさせたいのよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ (つぶやく)パ・ド・ドゥですって？ 何のこと？ ああ、パ・ド・ドゥね……ジャンプのときに足を後ろに投げ出してね、そして……ほとんど頭に触れるくらいだったのよ……音楽の高まりに合わせて大きくジャンプ！ そしてフィナーレのバリエーションで、回転……

マイヤ・イワーノヴナ フィナーレのことはいいんだけど……フィナーレは、ほらこれよ、この乳母車の中から聞こえる泣き声ね……ということは、この子の肌が黒いのはそういうこと……オーレンカ・ヤーコヴレヴナ、単刀直入に言ってちょうだい、パ・ド・ドゥはあったの、それともなかったの？

オリガ・ヤーコヴレヴナ (罪を認めて、頭をもたげる)一度だけあったわ……

マイヤ・イワーノヴナ エチオピア人ってすごい民族だわ！ たった一度で十分なのね！

²² 男女二人によって展開される踊り。

オリガ・ヤーコヴレヴナ でもこういうことって、芸術家にはよくあることでしょ……一緒に踊っているうちに……情熱が高まって……そして……芸術家にはよくあることなのよ！

マイヤ・イワーノヴナ こういうのは、芸術家だけの話じゃないわ！ それで、旦那さんは知ってたの？

オリガ・ヤーコヴレヴナ あの人は私が妊娠していたときに事故で亡くなったから。私は夫の子供を身ごもっているって、疑いもしなかった。全く疑ってなかったのよ……私は夫のこと、すごく愛していたの、だからあの人は全くの偶然なの、芸術のせいよ……

マイヤ・イワーノヴナほんと、芸術がこんな風に人生に影響を及ぼすはね！ オーレンカ・ヤーコヴレヴナ、どうしましょう？ これじゃあの子たちの家族が崩壊してしまうわ！ 私の娘は悪くないのに！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私は……私はあの子に言うことはできないわ……あの子はわかってくれない！ 私は息子を失ってしまう！ すべてを失ってしまうわ！ そうなったら生きている意味なんてあるかしら？

マイヤ・イワーノヴナ そんな、亡くなった父親の前で息子に罪を告白する必要なんてないわよ！ なぜオレグがあなたを責められるの？ どうしてそんなことができる？

オリガ・ヤーコヴレヴナ あの子は許してくれないわ！ あの子はね、私が聖なる女性だと思っているの……でも、あの子をがっかりさせることになるのね？ 私は実はこんなことを……って理解してもらわないといけないなんて……

マイヤ・イワーノヴナ でも、そんなすごい高みから飛び降りるようなことしたら、破滅してしまうわ！ 私たち母親って、愛される存在だから、子供の前ではまるで自分の人生が聖者伝のように披露しちゃうのよね！ ちょっと忘れたところがあれば、綺麗に取り繕ったりして、そのうちその話を全部信じ込んじゃうの……悪気はないのだけどね！

オリガ・ヤーコヴレヴナ こうなったら、真実を直視しないとイケないのね……私は……私自身は、あの子に理想の母親像を抱かせて……その理想像を守ってきた。だから、このショックはあの子には恐ろしすぎるんじゃないかしら！ 私に幻滅してしまうわ！ これで私たちの関係が崩壊してしまう！ 私のこと、軽蔑していらっしやるでしょう？

マイヤ・イワーノヴナ 私が？！ いえ、私の心は破裂しそうよ、それくらいあなたのことがわかるの！ 真実が全てを台無しにしてしまうこともあるっていうのは、私もよくわかってる！ もちろん、すべて終わった後で、また元通りになるのだけど、でも私たちには、元通りになるまで待っている時間はないのよ。

オリガ・ヤーコヴレヴナ それならどうしたらいいの？ 何をしたらいい？

マイヤ・イワーノヴナ 困ったわ！ 解決法がないのよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 解決法ならある！ 覚悟を決めなきゃ！

マイヤ・イワーノヴナ オーレンカ・ヤーコヴレヴナ、それはダメよ！ 何か考えてあげますから！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 秘密はすべて明らかになるものなのね！

マイヤ・イワーノヴナ しかも、明らかになるのは、いつも都合の悪いとき！

オレグが出てくる。

オリガ・ヤーコヴレヴナ どうだった、オレグ？(彼に飛び込んでいき、抱きしめ、号泣する)

オレグ ママ！ 聖なる僕のママ！ ごめん、ごめんよ、ママにつらい思いをさせてしまっ
て！

マイヤ・イワーノヴナ エーリカは何て？

オレグ 僕がお願いしたことは、真実を言ってくれ、それだけだ！ そしたら全て許すか
らって！ そうしたら僕はあの赤ん坊を僕の子だって考えることにするからって！ 今後
は絶対に責めたりしないから！ どうか真実を言ってくれって！

オリガ・ヤーコヴレヴナ それで？

オレグ あの赤ん坊は僕の子だ、誓って言うって！ 僕は自分のことなんかより、エーリ
カの言うことをずっと信じてきたのに……

オリガ・ヤーコヴレヴナ でもどうしてあの子のことを信じるのをやめたの？

オレグ どうしてだって？(乳母車に近づいて、赤ん坊を眺める)僕は、息子が生まれて欲
しいって思ってたんだよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私の話、覚えてるでしょう、窓際に立って……妊娠していたこ
ろの私……この世でたった一人っきり……希望もない、守ってくれるものもない、生きて
いく術もない……でも今の方が最悪だわ。

オレグ 僕は彼女に問い詰めてみたんだ、どうして、どうして赤ちゃんの肌が黒いんだっ
て。そしたら彼女はこう答えたんだよ。「私は自分の子を誇りに思うわ！ そんな馬鹿げた
問いの答えは自分で考えたら」って！ 彼女は僕を痛めつけようとしてるんだ！ もう愛
してくれていないってことさ！ それはもうあからさまだし、装おうともしていないし
ね！(赤ん坊を見る)

「でも装ってくれ！ その眼差しは何でもいとも見事に表現できるのだから！ ああ、僕
をだますことなんか難しくない！……僕はだまされて光栄だ！」²³

(赤ん坊に)笑ってるのかい？ 僕たち二人とも、運に見放されたってこと、まだわからな
いよな？

オリガ・ヤーコヴレヴナ この子、詩が大好きなのね！ 私も朗読してあげましょう。

「わが友よ、過ぎ去った年月の足跡、そして若き頃の不穏な日々はもう忘れ去られた。私
に問うな、なかった出来事を、そして悲しみと喜びを味わった出来事を」²⁴

²³ プーシキンの詩「告白」(1826)より。邦訳はないが、ロシアでは有名な詩とのこと。

²⁴ プーシキンの詩(1821)より。邦訳はないが、この詩もロシア人なら誰も知っている詩だ

坊や、笑ってるのね！ 詩がどういうものかわかるのよ！（泣く）

オレグ びっくりだ！ ちゃんと朗読を聞いている！

「すべてはおしまいだ。僕たちにはもう関係なんてない。最後に、君の膝を抱き、悲しい泣き言を口にした。すべてはおしまいね。君の答えが聞こえる」²⁵

オリガ・ヤーコヴレヴナ 大声で笑ってるわ！

「いとしい幼子をあやし、こう思う。さようなら！ おまえに席を譲ろうと。私は朽ちていく身、おまえはこれから花盛り。願わくば、私の墓の入り口で、若きいのちが遊び戯れ、のどかな自然がとこしえの美しさに輝かんことを。」²⁶

大声で笑って、あんよをばたばたさせてるわ！ プーシキンが好きななのね！ ほら、何から何までオレグそっくり！

マイヤ・イワーノヴナ ほんとに活発な子だこと！ 詩なんか自分で書けそうね！

オレグ 僕は行かないと！

オリガ・ヤーコヴレヴナは苦々しく笑う。

オレグ 何で笑ってるの？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 笑ってるって？ それはね、悲しいからよ！ 待って！ すべてをあなたに話しましょう……考えがまとまらないのだけど……私ね……あなたに理解してもらうのは難しいかもしれないけど……私自身も、本当にずっと、こんなことに特に意味はないと思ってたんだけど……信じられないことなんだけど……信じてくれないでしょうね、でも……

オレグ ママ、落ち着いて……いろいろあったけど、わかってくれるかな、僕はママのことを本当に尊い存在だと思ってるんだよ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ ああ、なんてこと、なんてことなの……神さま、助けて！ 今、今言うわ……

マイヤ・イワーノヴナ （赤ん坊を両手で抱き上げて）全くプーシキンと瓜二つだわ！ ご覧なさい！ ただ、あれがないけど、あれは何て言ったかしら？（ジェスチャーで示す）

オリガ・ヤーコヴレヴナ 頼ひげがないわ！

オレグ もし僕の子がプーシキンと瓜二つだったとしたら、ダンテス役は僕ってことになるな！²⁷

という。

²⁵ プーシキンの詩(1824)より。邦訳は『プーシキン全集 1 抒情詩・物語詩』（草鹿外吉、川端香男里訳、河出書房新社、1973年）でも紹介されている。

²⁶ プーシキンの詩「さわがしい街をさまようときにも」（1829）より。邦訳は、『プーシキン詩集』金子幸彦訳、岩波文庫、2008年、155-157頁を参照。

²⁷ プーシキンを決闘で殺したフランス生まれの士官。プーシキンはダンテスが妻のナターリアに求愛しているという社交界での噂を信じ、嫉妬心から決闘に臨んだ。ここでオレグ

マイヤ・イワーノヴナ いいこと、今ダンテスのことは全然関係ないの！ オーレンカ・ヤーコヴレヴナ、どうして黙ってるの？

オリガ・ヤーコヴレヴナ 私？ 私は黙ってなんかいないわ！ 今言おうと勇気を振り絞っているところよ！

マイヤ・イワーノヴナ だって、あなたついさっき私に教えてくれたでしょう……

オリガ・ヤーコヴレヴナ (遮って)私が言うわ！ いえ、やっぱりあなたが言うてくださるかしら！

マイヤ・イワーノヴナ (憤慨せず続ける)……つまり、あなたのお父さんの方の家系にね、プーシキンがいるのよ、エチオピア人の家系の……

オリガ・ヤーコヴレヴナ エチオピア人？！ たしかに……エチオピア人とは関係はあったのだけど……でもたった一度きりのこと！

オレグ エチオピア人がどうして関係あるの？ ママ、わからないな……

マイヤ・イワーノヴナ エチオピア人は関係ないの！ 私が言ってるのはプーシキンよ！ プーシキンが大事なの！ プーシキンはエチオピア人の血を引いているでしょう！

オレグ でもなんでプーシキンなの？

マイヤ・イワーノヴナ 彼はあなたたち家族の親戚なの。父方の家系の。プーシキンにはエチオピア人の親戚がいたじゃない！ あなたと同様、父方の方に！²⁸ なんていう偶然かしら！

オレグ プーシキンが？ 親戚？ 僕達の？ ママ！ そんなこと一度も話してくれたことなかったよね！

マイヤ・イワーノヴナ オーレンカ・ヤーコヴレヴナは、ほんとうに慎ましい人だから！

オリガ・ヤーコヴレヴナ それは……それは……パパのね、家系の方で……

オレグ パパの家系をたどると、僕達の先祖にプーシキンがいるってことなの？ どうしてもっと早く言ってくれなかったの？

オリガ・ヤーコヴレヴナ でも……それは何と言うか、家族の言い伝えっていうか……私には証明書もないし……それに……自慢したくなかったのよ！

オレグ ママ！ ママが黙ってたせいで、僕たち皆破滅するところだったじゃないか！ 証明書って何？ どうしてそんなものが必要？ ほら、これが証明書だよ！(赤ん坊を取り上げ、自分の身にぐっと引き寄せる)僕はね、おまえが僕の息子だって、ずっとわかってた

は、この決闘のエピソードをもとに、もし仮にも自分の子がプーシキンと瓜二つだとしたら、エーリヤはプーシキンと関係を結んだということになり、それなら自分はダンテスとなって嫉妬心からプーシキンを決闘で撃ち殺してもいい、ということのを仄めかしている。

²⁸ プーシキンの母は、ピョートル大帝に仕えたエチオピア生まれの将軍ガンニバルの孫娘にあたる。つまり、実際にはプーシキンの母方にエチオピア人の先祖がいたことになるのだが、オレグを何としても説得したいマイヤにとっては、「父方に」エチオピア人の親戚がいることにしたいので、歴史的事実とは異なることを言っている。マイヤは文学の専門家ではないので、プーシキンの先祖について厳密には知らないのだろう。

よ！ずっと！

マイヤ・イワーノヴナ（オレグに鏡を持ってきて）よくご覧なさい！ 赤ちゃん、あなたに瓜二つじゃない！ ただ肌が黒いだけ！ でもそれはプーシキンのせいですからね。

オレグ 僕の息子！ ずっと感じてたよ、感じてた……僕はどうしちゃったんだろう？ 何かの錯覚だったんだ！ どうして僕のエーリヤが皆と同じような赤ちゃんを産むだなんて思っちゃったんだろう？ だって、彼女は何をやるにも、いつも他の人とは違うもんな！（息子を見て）もしかしたら、おまえ、偉大な詩人になるのかな……でも、もしなれなくてもかまわないよ。

エーリヤが入ってくる。

オレグ エーリヤ！ 君は……僕のこと、許してくれる？

エーリヤは見つめて、黙っている。

マイヤ・イワーノヴナ ほら、許してくれるわよ。あの子も許すってこと、そろそろちゃんと覚えたほうがいいわ。そしたら、ほら、二人で息子と一緒に散歩に行っちゃい！ もう時間よ。おばあちゃんたちにすっかりおんぶに抱っこになってしまったわね。

オレグ エルフ、ごめんね！ 君は……君はほんとうに聖なる女性だよ……

オリガ・ヤーコヴレヴナ（涙声で）私は聖なる女性、エーレチカも聖なる女性……こうして集まると、家族じゃなくて、イコノスタシス²⁹みたいだわ……（マイヤ・イワーノヴナの方に駆け寄って）マーエチカ・イワーノヴナ、神さまがあなたを私のもとに遣わせたんだわ！（若い2人に手を振って）ほら、息子とお散歩に行っちゃい！ 春なんですから！ 私たちはその間、ここでお昼ご飯を作ってますから、だって、エーリヤは料理よりもバレエの方が早く上手にできそうだから！

マイヤ・イワーノヴナ（エーリヤを駆り立てようとする）エーリヤ！

オリガ・ヤーコヴレヴナ エーリヤ！

エーリヤはオレグに向かって歩みを進める。オレグは赤ん坊を両手に抱えて、彼女の元に飛び込んでいく。そして2人は互いに抱き合いながら固まる。

オレグ 大好きなエルフ！ またもう1人赤ちゃんを産んでね！ どんな肌の色でもいいからさ！

マイヤ・イワーノヴナ エーリカ、あなた、やっと大人になれたわね！

²⁹ ロシア正教の教会にある、聖人のイコンが沢山はめ込まれた壁。聖所と至聖所との間を仕切る場所にある。

オリガ・ヤーコヴレヴナ エーレチカ、あなたは私の喜びの子よ、あなたにしてあげられることがあるかしら？ 教えてちょうだい！

エーリャ (オリガ・ヤーコヴレヴナの方に振り返り、狡猾そうに尋ねる)パ・ド・ドゥを教えてください！